

(無題) 未来を担う子どもたちにできること

港ユネスコ協会理事 原 不二子



寝ても覚めても福島県の子どもの持つ母親たちのことが脳裏から離れない毎日です。「子どもは未来の宝」、「子ども手当を手厚くする」と言いながら、その子どもたちを護ることが一向に為されていないのが現状です。福島県知事が、せめて18歳未満の子どもや少年少女を原子力発電所事故に伴う放射線被曝等の影響から救うため医療費を無料にして欲しい、と首相に願い出しましたが、それも結局は、できないことと断られました。福島県は、国がしないなら、県で行うことを決定しました。

現役世代の私たちは、未来を担う子どもたちに何を教えてしまっているのでしょうか。技術の継承も立派かもしれませんが、それより大切な「人間として護るべき道徳心」を身をもって教えているのでしょうか。利権に繋がる人たちが原子力安全委員会を創り、科学的な根拠をよそに、安易に安心安全を風潮するのに甘んじ、最悪の事態に備えることを怠ってしまったのではなかったのでしょうか。その結果、市民の生命を脅かし、生活を奪い、故郷・祖国を汚染し、大気・大洋を通して世界中に放射能を撒き散らしています。

その仕組みを創り、その上に長年あぐらをかいていた前政権も、その処理に戸惑う現政権も、一向に現状に対する責任を取ろうとしないどころか、この国難、いえ、人類に対する大きな過ちを犯しながらその責任をとらないだけでなく、政局の具にさえ利用しているのです。

統治機構である政府は何のためにあるのかといえば、一にも二にも市民の生命と財産を護るためにあるのです。19世紀の英国の哲学者ハーバート・スペンサー（1820-1903）の言葉を借りれば、「政府は全ての人が幸福に対する同等の権利を持っていると言う法則を実行する為に存在している。市民の権利が政府より尊いのは、目的が手段より尊いのもと同じ」なのです。

子どもを放射能被曝から護るために、働くために県内に残る夫、父親をおいて、後ろ髪をひかれながらひとまず他県に身を寄せる母親たち。慣れない土地での生活を懸命に生きる勇気ある母親たちが恐れているのは、帰郷したときに浴びるであろう「あなたたちは逃げたくせに」という冷たい言葉だと思います。彼女らの勇気を称えるべき人たちからの仕打ちはどれだけ心に傷を残し、社会の結束を壊すでしょうか。

皇后さまが英訳され、1982年と2001年に英詩朗読会で朗読された竹内てるよ（1904-2001）の詩、『生まれて何も知らぬ吾子の頬に 母よ 絶望の涙を落すな』（文春文庫）を、子どもを護るため信念をもって頑張っている、勇気あるお母さんたちに送りたいとおもいます。

株式会社ディプロマット代表取締役
(財)尾崎行雄記念財団常務理事

子育てで一番大切なこと

港ユネスコ協会理事 坪谷ニューエル郁子



社会は、狩猟社会から農耕社会、工業社会、そしてコンピューター社会で迎えた情報社会の21世紀も今や知識経済社会へと変容している。

この多様化する社会で生き抜く為に必要なスキルは、1. 問題解決能力、2. 自立的に学習する能力、3. 情報通信テクノロジーを扱う能力、4. グローバルな認識と社会市民としての意識、5. 金融、経済に対する教育、6. 数学、科学、工学、芸術分野への理解、7. 創造性と私は考える。

これらのスキルを身につけ、全人教育、すなわち価値観の異なる他と共生し、社会に貢献し、自らも幸せに生き抜くことができる人材を育成する教育、21世紀型教育の創造、提供、運営を始めてから早いもので27年が過ぎた。

今では、インターナショナルスクールでの60カ国の児童への教育のみならず、日本の教育機関との共同による教育の提供等と、子供達、教育に関わるという天職に恵まれて、こんな幸せなことはないとつくづく思っている。

こうして社会は変容しているが、どの時代においても変えてはいけないことがある。それは、家庭教育である。社会の一番小さい単位は動物としての個、そして次は家庭であり、そこでの教育が個を人として成長させていく。つまり子供達にとっては、日常生活そのものが家庭教育とも言える。

子供達に限らず、私達誰にとっても社会の土台は家庭にある。そして家庭教育の柱は、もちろん日常を一緒に暮らす保護者にある。しかし近年は、その保護者が家庭よりも小さい単位である動物としての個の精神的な未熟さや多忙さから利己的になり、まず自分の都合や自分にとってのその場限りの楽しみを優先することを、「自立」や「まずは自分の幸せを考えよう」と正しいことのように解釈する価値観が台頭しているような気がする。

その結果、家庭教育、しいていえば家庭の存在そのものが崩壊し始めていると感じているのは私だけであらうか？

家族は互いを気遣い、感謝し合い、思いやって生活することが、教育の基本なのではないか。親を尊敬し、大事にする。夫婦は互いを信頼し合い、愛し合い、かすがいの子に精一杯の愛情を注いで夫婦共に育てる。兄弟は互いに助け合う。どんなに時代が変わろうと、私はこの価値観は、不変だと信じている。私達は、誰一人、一人では生きて行けない。全ての事象は互いに支え合っているのである。根っこの部分は全て繋がっているのである。

NPO インターナショナルセカンダリースクール理事長
東京インターナショナルスクール代表
日本国際教育センター代表取締役

2012年9月1日発行第129号

港ユネスコ協会との出会いー私の活動の原点ー

いっくら国際文化交流会会長

宇都宮ユネスコ協会会長

港ユネスコ協会理事長門芳子

「素晴らしい出会いは人生を何倍も豊かにする」と思う。1974年12月末から7年余り夫の転勤で港区三田4丁目伊皿子交差点近くの社宅に住んだ。息子の明治学院高校PTA活動に全力投球、同時進行で朝日カルチャーセンターや港区教育委員会主催の各種講座を受講、専業主婦の私が社会参加に目覚めた金色に輝く充電期だった。「国連婦人の十年」男女平等・女性の地位向上・社会参加という世界的なうねりに敏感な「港区婦人学級」は、魅力的な内容だった。企画運営委員の一人としてプログラムの企画実施を担い、多くの学びの場とチャンスを得た。



1981年4月末、港区教育委員会の要請で、5月22日国際文化会館で開催された「第1回港ユネスコ協会設立発起人会」に出席した。メンバーは、国際的にも日本を代表する各界の著名な方々ばかりで、一区民の立場で参加の一介の主婦の私は、緊張のあまり満足な自己紹介も出来ずに自信喪失したことを今もはっきり憶えている。1981年4月25日、足利ユネスコ協会事務局長として活躍していた大好きな父が、突然交通事故で亡くなって間もない頃だったので、不思議な縁を感じ「ベストを尽くしてチャレンジしてみよう！」と心に期した。

1981年10月17日、白金迎賓館を会場に盛大に開催された「港ユネスコ協会設立総会」で活動が開始した。丹下健三初代会長、三輪公忠二代目会長の下、常任理事・婦人活動委員長として、協会揺籃期の機関車役を担うことになり、最初に婦人活動委員会が企画した事業は、1983年1月23日、難民支援の「外国人にお正月行事を紹介するチャリティニューイヤーパーティ」会場：みなと幼稚園、1983年8月28日「インドシナ難民と子どもの国へワンデーキャンプー森林浴を楽しもう！」会場：横浜・子どもの国、1982年6月3日、国際パネルディスカッション「80年代国際化時代の女性の生き方」(英語・日本語同時通訳付)会場：港区立婦人会館、この三事業は、協会役員が一丸となりバックアップ、婦人学級・青少年健全育成・キャンプリーダー、港区青年会議所他の協力、により盛会裏に開催。テレビや新聞に数多く報道され、港区発の「地域協働モデル事業」だったと思う。港ユネスコ協会の大きな胸を借り、民間団体の組織作りとボランティア活動のノウハウを学び、私のすべての活動の原点となっている。

1983年6月6日、「宇都宮に国際的なボランティア活動を根付かせたい」の熱い思いから、新聞・ラジオの呼びかけで仲間を募り、ユネスコ理念を掲げ「いっくら国際文化交流会」を創立。三輪公忠会長に英語名「InterCulturalCommunityLifeAssociation」と命名して頂いた。港ユネスコ協会では出会った良き指導者とバイタリティ溢れる素敵な仲間、地域や分野を超えた支援者・応援団との多くの素晴らしい出会いを重ねた結果、30年に亘る「地球家族のきずな求めた」心と心が響き合う国境を超えた交流は130か国余の対象国となった。お世話をした外務省モンゴル元研修生有志が創設した「ウランバートルいっくら」も

本格的な活動を開始した。去る6月16日～25日、創立30周年記念事業で招聘したモンゴル訪日団を港ユネスコ協会が東京一日ツアーに招待。宇都宮ユネスコ協会青年部「宇都宮大学 UNESCO 研究会」企画の「UNESCO ユースフォーラム in みなと」今年2度目の招待に深く感謝している。

2012年12月1日発行 第130号

夢の実現へ向かって

港ユネスコ協会 副会長 今村孝子



この度は、緊張する巻頭言執筆という場をあたえていただき、港ユネスコ協会とのかかわりについてふりかえる機会をいただきました。

高度成長のさなかにあつて、企業戦士の夫に仕え3人の息子たちをかかえる母親にとっての日常は、日々の一人一人の生活にとことんつきあうことでした。数年の外国赴任生活を体験、思いがけない病気治療の期間をへて、世の中のいろいろなことを見聞することでこれからの我が家のあり方を模索していたように思います。

港ユネスコ協会の設立はそんな私の心を揺さぶり、国際性や社会性をなにより必要とする次世代の若者や親たちに刺激や示唆を与えました。

1982年、設立の翌年に開かれた国際パネルディスカッション「80年代国際社会における女性の生き方」の評論家広中和歌子さん、上智大学助教授の村瀬アンさん、国連難民高等弁務官事務所渉外担当官ヤン・ミンジャさんの3人の女性のお話はとても画期的であり、時代に先がけた魅力ある企画でした。つい誘われるままに入会し、新しい女性のあり方と国際化の風に吹かれないと思ったことを思い出します。客観的な見方をさらに広げ、自律して考えることのできる人格を養う必要性を強く感じました。

国際交流、相互交流、相互理解を主眼に発進する港ユネスコ協会の活動は多岐にわたり、つぎつぎと企画される国際シンポジウム、講演会、国際交流ニューイヤー・フレンドシップパーティ、YFU留学生やフィリピンの大学からの学生との交流会など、10年、20年、30年とつづき、今、私が担当する世界の味文化紹介シリーズは来年早々100回を迎えます。また、地球人として共に生きるために助けあおうと、日本ユネスコ協会を通じて協力するコアクション活動や識字支援活動は年間をとおして長い年月行われてきました。いつしか私もその中で、くんずほぐれつのボランティア活動に加わり、社会の沢山の先輩方や会員の方々とともに働き、合計3年間の事務局担当はかけがいのない経験となりました。

会長自ら編集にかかわられた30周年の記念誌には、いままで実施された事業がすべて網羅され、その重みは文字になって圧倒されますが、並々ならぬボランティアの力による汗の結晶はたいへん貴重であり、港ユネスコ協会の誇りであり宝になっています。一人ではできないことも、男女、年齢、国籍、学歴、経験のちがいを越えて人間力を結集し、知力・体力・時の運によってどんなにも素晴らしい実りになるというかけがえのない体験を次の世代にまで伝え、東日本大震災で浮き彫りになり世界に認めら

れた日本人のすばらしさに誇りを持ちつつ、平和につながる活動が何とか世界に広がっていくことを願います。

国連のユネスコ憲章前文の初めに出てくる言葉「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」を、これからもまず自分のモットーにし、まわりに伝えていく活動にしていきたいと思います。

2013年3月1日発行 第131号

オーストリア・グラーツに今も残る日本の芸術文化

港ユネスコ協会 監事 菊地賢介



昨年秋にオーストリアのシュタイアーマルク州 グラーツに滞在する機会に恵まれました。

14世紀にハプスブルク家の都となった古都で、人口は24万人。数多くの温泉、変化に富む風景と牧歌的な雰囲気、またワイン愛好家にも大人気です。旧市街はユネスコ世界文化遺産に登録され、ウィーンに次ぐオーストリア第2の地方都市です。

多くの文化遺産が点在する旧市街を散策しながら、エッゲンベルク城に立ち寄り、あらためて多様な文化に触れる事が出来ました。

築城は今から380年前で、城主が宇宙感を表した城内の、3階フロアは52(1年の週数)の窓が取り付けられ、建物全体では365の窓になるよう設定され、日常必要な教会、大広間と24の豪華な部屋が配置されています。その一つに「日本の間」が設けられ、室内はまるで日本の芸術・文化の宝箱のようでした。

日本の工芸美術品は、城主が東インド会社などから買い付けたものとみられ、数ある陶磁器はガラスケース越しでの判断ですが、ウィーンのシェーンブルン宮殿で皇帝フランツ・ヨーゼフ1世・エリザベート皇后が多くの晩餐会で使用されたであろう「古伊万里」と同じ染付色付けであり、形状も数百年前そのままの状態で保存されていました。他にもシノワズリー「中国趣味」も当時の流行りであったようで、東洋の工芸品が数多く目に留まり、大変興味深く観賞することが出来ました。

また、「日本の間」の壁面を彩る装飾として、16世紀の安土桃山時代における、大阪城下の街並みから、京都宇治の平等院までが描かれた「大坂図屏風」が嵌め込まれています。ここには豊臣期の約10年の間の、街並みの佇まいと庶民の賑わいの光景が描かれていて、大変貴重な歴史的資料として保存されており、日本でも話題を呼んだそうです。

エッゲンベルク城を訪れて、日本の芸術、文化に触れ、世界中の大勢の人々の心を魅了しつづけていることに日本人として大変、誇らしげな気持ちになりました。

海外であらためてユネスコ世界遺産の素晴らしさを体験したのと同時に、日本国内でも、これからユネスコ世界遺産になり得るであろう、先祖から受け継いできた、伝統文化、建築技術、遺跡などの、価値ある預かりものを、大事にすることの大切さを感じました。そして、次の世代を担う青年達と我々の子、孫達にも伝えて行く活動に港ユネスコ協会のフィールドのなかで携わって行ければと願っています。

2013年6月1日発行 第132号

活動に復帰して

港ユネスコ協会 理事 山田攝子



港区で結婚生活をスタートして間もない頃、区の広報誌で「港ユネスコ協会」が設立されることを知りました。職場との往復に終始し、地元・地域との関わりが希薄であると感じていた時期であり、早速に、個人会員として入会しました。入会当初は、港区民祭でのコーアクション（寺子屋運動など）や 折り紙での交流活動など、休日の活動に細々と参加していましたが、子育て時期に他区に転居した後は、ブリティンの定期便と「会費納入」のみが会との繋がりという幽霊会員の時期を長々続けておりました。

数年前、ふと 思い立って、20余年ぶりに当会の総会に出席し、その際、心地よく引き込んでいただき、委員会に所属して活動を再開させていただくこととなりました。社会経験も人生経験も様々である方々が、それぞれの得意分野を持ち寄り、摺合せ、数々のイベントを実現させていく場に関わって、30年の積み重ねの底力を感じています。

ボランティア団体にありがちな、「創設期のメンバーで固定化」との現象もありません。懐かしいお顔に、新たな出会い。不規則な仕事の合間の、飛び飛びでの参加をお赦しいたさながら、民間ユネスコの精神の下に集う会員との活動と交流を楽しむこの頃です。

当会の会則によれば、「本会は、ユネスコ憲章の精神に基づき、国際的相互理解と協力親善を通じて、社会の発展、さらに世界平和と人類の福祉に寄与することを目的とし（第3条）」、この目的を達成するために、「（1）ユネスコ精神の理解と普及をはかるための事業 （2）国際的文化交流および親善をはかるための事業 （3）地域の教育的・科学的・文化的発展をはかるための事業 （4）その他本会の目的を達成するために必要な事業をおこなう。但し、特定の宗教および政党を支持する活動はおこなわない（第4条）」と定められており、

この目的に賛同する者は、会員になることができ（第5条1項）、「会員は、その活動に積極的に参加し、会費を負担する（同条2項）」ものとされています。

この、「積極的に活動に参加し」の部分は、なかなかハードルが高いと感じられますが、「出来るときに、出来る範囲で」受容られることは、上記のとおりです。積極的活動がご無理な方も、お時間があるときに、気軽にイベントにお出かけ下さい。出向かなくとも可能な活動もあります。当会のミ

ンダナオ子ども図書館支援、各地の民間ユネスコ協会が行っている寺子屋運動等のコーアクション協力等、ネット検索で様々な「参加の場」や「情報」に接することが出来ます。

会長から何か書くようにと言われて逃げ切れず、会員の皆様への活動参加のお誘いと「新規会員勧誘」の意図をもって、長期幽霊会員の時期を経た一会員の駄文を記させていただいた次第です。

以上

2013年9月1日発行 第133号

心に刻む言葉

港ユネスコ協会副会長 永野 博



座右の銘とは？と問われると困惑する。では、何もないかということ、演説の中に、とても私の心に残る一節がある。

それは、私の在西ドイツ大使館在任中のことであったが、同国のヴァイツゼッカー大統領が、敗戦の40周年（1985年5月8日）の際に連邦議会で行った「荒野の40年」といわれる演説にある次の文言だ。

「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる。」（原語では、*Wer vor der Vergangenheit die Augen verschliesst, der wird am Ende blind für die Gegenwart.*）というものである。

そもそもこの40周年の式典については、なぜ中途半端な40年を取り上げるのか、50周年を大きく行うべきではないかなど、その実施に疑問符がついた際に、ヴァイツゼッカー大統領は、旧約聖書での物語を取り上げ、民族にとっての40年の意味を説いている。それは、イスラエルの民が約束の地に入る前の40年間、荒野をさまよったのは、責任ある世代の完全な交替には40年が必要だったとされたこと、また、人から助けてもらった記憶は40年しか心に刻むことができず、それが途切れるやいなや、平和が終わりを告げた、というものである。

大統領は、プロテスタント教会会議議長も務めたことから、心に刻み続けるとは、神の行いを体験していくことであり、それこそが救いと和解への信仰の源であり、それを忘れることは、和解からも遠ざかる、と考えている。この言葉の前後では、「罪の有無や年齢にかかわらず、みな、過去を受け入れねばなりません。すべての人が、過去の出来事に伴い生じてくることに遭遇し、かつ、責任を取らねばなりません。このことを心に刻みつづける重大性を認識しつづけることができなければ、同じ過ちを繰り返すことになるでしょう。」と述べている。

また、演説の最後では、「若い人々は過去に起きたことには責任はありません。しかし、そこから生じてきたことに対しては責任があります。年長者の責任は、若者の夢の実現にではなく、かれらの誠実性の実現に対して存在します。それは、若い人々が、心に刻むということが、どれほどに大切なことかということを理解できるよう助けなければいけないということです。」と締めくくっている。

ここまできて改めて考えてみると、このヴァイツゼッカー大統領の思想と、ユネスコ憲章の「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」には著しい共通性のあることがわかる。私がユネスコ活動に惹かれるのも、こんなところに理由があるのかもしれない。

2013年12月1日発行 第134号

三無主義を考える

港ユネスコ協会 顧問 見上良也



現代は三無主義といわれる。無責任，無神経，無関心，か。それも若者だけでなく，60代ぐらいの年齢層にまで広がっている様子が手にとるように見える。自身の欲望だけがあらわになっている。

TVで久しぶりに Audrey Hepburn の”Charade”を観た。彼女の役柄は，何事にも関心を持ち，好奇心があふれていて，素早い行動で問題と向き合い，解決に導く。それが美しい表情の中で瞬時に変化をとげていく。彼女の役は，パリ・ユネスコ本部の仏英の同時通訳者をつとめているので，興味をそそわれた。

私自身の長年にわたる仕事は表現者を育てることだ。舞台，映画，TV，ラジオは音響芸術なくしては成り立たない。そこに生身の表現者が Story を編んでいく。演技者だ。彼らの育成には東西の演劇史と演技論が不可欠だが，紀元前5，4百年ソポクレスが実話に基いて書いたといわれる「オイディプス王」に始まり，シェイクスピア，ラシーヌ，モリエール，イプセンなどの作品から，日本の能狂言，歌舞伎など一通りの知識を基に，演技論に入る。音響芸術もコンサート，ステージ，映像などの表現技術へと進む。

これら古今東西の作品の中には複雑な人間模様はもとより，政治，経済，社会の様相が描かれ，今も昔と変わらぬ世界がそこにある。

小学校5年生で東京大空襲の直中で生きのびた経験を持つ私としては，戦争が頭を離れたことがない。今の中東の紛争からも目が離せない。

「未清算の過去の諸問題」というドイツ演劇の岩淵達治さんの論考がある。冒頭の無責任から類推して，戦争責任の問題を考えてみる。

ドイツが連合国の戦争裁判とは別に，ドイツ人の手で戦争裁判を行ったが，日本では戦争責任の追求はされなかった。かつてA級戦犯として占領軍に逮捕された人物が首相にもなった。70年に国連総会で成立し発効した「戦争犯罪および人道に反する罪に対する時効不適用に関する条約」に日本は批准していない，と理解している。

私たち日本人は律義で勤勉でと言われるが、大切な要点をおろそかにすることがある。人によって相違があろうけれど、面倒な事象を避けたいという気持ちはないか、と問いたい。何かが発生すれば、問題と向き合い、解決に取り組むこと。このことは今の近隣国との軋轢にしても確りと話しあい、行動することが必須だと強く思う。

遠因をたどれば三無主義はこんなところに起点があるのかも知れない。(2013.11.29)

2014年3月1日発行 第135号

国連大学について

港ユネスコ協会 監事 永井美智子



港ユネスコの会員だというだけで、出会ったばかりの方達ともバザーや講演会などの開催のために協力し、意見の違いがあっても率直に話し合い、会員としての連帯感を深めあう、そんなこの十数年を、私は感謝に満ちて、誇りに思っている。

この巻頭言の貴重な場をいただいて、亡夫永井道雄が最後まで夢を託していた国連大学のことを、私よりよくご存知の方もおられると承知の上で、私の知る限りの現況を報告させていただこうと思う。

1969年第24回国連総会で、故ウ・タント国連事務総長が「国連大学創設案」を発表されて以来、その日本への本部設置による日本の教育改革と世界平和への貢献を夢とした亡夫の奔走が始まった。

多くの国々からの誘致運動は激しかったが、故佐藤栄作総理を先頭に、日本の政・官・財界と学界の協力により、1975年に国連大学本部の仮事務所が渋谷に設置された。以後紆余曲折を経て1992年には東京都港区青山に本部ビルが完成した。

その後は、世界に15の研究・研修センターを設け、その他の多くの研究機関と提携して、世界の国々の安全保障や平和維持のための国連活動のシンクタンクとして役立つ研究を重ねている。

2009年の国連総会で大学院設置が承認され、一昨年には「サステイナビリティと平和研究科」の修士一期生が学位を取得した。

2012年には、博士課程（定員数名）も開設された。世界各国から毎年50～60倍の難関を突破した修士課程の学生の中には、毎年1人か2人は日本人もいる。

国境を越えた多種多様な難局に、専門的で高度な知識と訓練とそして理想を持った国連大学大学院卒業生達が、世界の隅々で国連活動に携わる姿を見るのも近い。

昨2013年、第六代学長に就任されたデイビッド・マローン学長は、「国連大学の本来の責務である国

連のシンクタンクとしての研究活動と人材育成をより強力にする。そしてそのために日本社会全体の理解と協力を得るよう努力する。」と言われた。当り前のことのようにあるが、今迄の学長の宣言としては初めてのように思える。毎年の政府からの分担金削減に対応するために、亡夫が苦勞していたのを思い出し、この対応とともに大学院生の奨学金基金確保も、と宣言された現学長の苦勞が案じられる。

国連大学の活動を広く理解していただけるようにと、青山の本部で、いろいろな講演会が無料で公開されている。ウェブサイトに興味を持っていただけるテーマを見つけては参加していただけたら、それが学長やスタッフにとって大きなサポートになるであろう。

2014年6月1日発行 第136号

歴史の運行を支えている時代精神は小説に学ぶ

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪公忠



広島原爆犠牲者慰霊碑に刻まれた碑文「安らかに眠ってください。過ちは繰返しませぬから」に賛否両論があがった。公式見解は、主語を人類全体とし、愚かしい戦争の廃絶を願い、その覚悟を表明したものとされている。

しかし普通は、日本人の戦争責任として、戦後日本人の反省、絶対平和への覚悟と理解されているのではなかろうか。

もっとも激しい批判は高名な言論形成者からも聞こえてきた。原爆を投下したのはアメリカである。アメリカの自己批判と反省、祈りと覚悟のことばとして、アメリカ大統領の署名こそが相応しいと。

しかし、この理屈を納得するアメリカ人はいない。第一、当のトルーマン大統領は退任後、広島市長の信書にこたえて、あれはペリーのおかげで開国し列強に参画するようになった日本の忘恩行為への懲罰であるといった。また毎年広島攻撃の記念日にエノラ・ゲイの飛行士たちは、ウォルドルフ・アストリア・ホテルに集い、水爆実験が成功した年には、「やれと言われりゃ、何度だってやるさ。だって奴らが始めた戦争じゃないか。水爆なら、もっとでっかい音がするだろうけどよ」と氣勢をあげている。つまり原爆による無差別大量殺戮は真珠湾攻撃への報復だということだ。

たがそこに人種的偏見はなかったろうか。というのはエール大学の日本学の教授ジョン・ホールは同じころに「あれは日本人に対してだからやれたことで、ドイツにはできなかったのではないか」と国民的自責の念におそわれた。つまり、日本人に対する人種差別観を反省した。

アメリカ人の日本人に対する不信観を歴史的に裏づけることはできる。歴史研究において、公文書の使用は重要である。その分析には、その時代の精神を心得ていることが大切である。有効手段の一つは、その時代の小説を読むことである。

たとえば 1910 年代前後のアメリカでは日本人の大量移民に対する激しい反応があった。この時代の精神は、たとえばスコット・フィッツジェラルドの小説を読むだけでかなりわかる。ハーヴァード、エール、プリンストンに学んだエリート青年らが、「日本が攻めてくる」、「アメリカが占領される」などと呟くのである。真珠湾攻撃は、ただその実証であり、避けがたい歴史の運行に過ぎなかった。

この運命観がよそ目にどれほど極悪非道に見えようとも原爆投下への反省、自己批判を呼び覚ましたりはしないのである。(2014・5・19)

(上智大学名誉教授)

2014年9月1日発行 第137号

百聞は一見に如かず

港ユネスコ協会 理事 中前由紀



年頭の抱負を、今年は「百聞は一見に如かず」に決めました。言い古された言葉ですが、改めてこの言葉を心に刻んで行動しようと思いました。

区議会議員として仕事をするうえで、現地・現場で五感を通して学ぶことの大切さを強く感じます。地域密着の仕事なので、限られた地域内で動くことが多いのですが、身近な街ばかり見ていては自分やまわりの常識を中心に物事を考えてしまいがちになるのではないかと思うことがあります。離れた地域や、さらには海外の都市に足を運び、生活様式、価値観、文化、街のルールを直に見聞きすることで、多くの発見や刺激があると思います。

11年前に議員になって以来、海外に出かけたのは2回です。まとまった時間がとれないことに加え、個人的な海外旅行に少々ためらいがあったからです。しかし港区は外国人居住者や来街者も多く、外国人向けサービスの充実も課題の一つです。

今年は海外へも躊躇しないで行こうと決め、4月にロンドンに行ってきました。

区議会の委員会や地域の用事などは直前に入る場合もあり、日程調整が大変でした。しかし日程さえ決まれば、片付けるべき仕事を済ませ、訪問先の下調べをするなど、充実したひと時でした。旅慣れてなく、英語も堪能でない私が、自分でスケジュールを組み、手配し、ひとりで海外に行くのは、いい意味で緊張感が一杯でした。

行き先をロンドンに決めたのは、6年後の東京オリンピックを見据え、成熟都市として直近の2012年にオリンピックを開催したロンドンの今を見たかったからです。

メイン会場には、あえて荒廃したエリアであるストラッドフォードを選び、オリンピックを機に地域

を整備したのです。2年経た今、その跡地は国内最大級の公園「クイーン・エリザベス・オリンピック・パーク」として賑わっています。開発が完成する2030年には、エコを柱に、スポーツ施設、大学、住宅、ショッピングモール、医療センター、メディアやテクノロジーの拠点などが集積し、積年の課題であった東ロンドンの街の再生が果たされます。

ロンドンの街で一番感動したのは建造物や公園の美しさでした。中心部だけでなく郊外にも調和のとれた美しいレンガ建築が連なっています。理由の一つは、新しい建物を建てると税金が高く、皆が古い建物を修復して使っているからとのこと。また、赤い二階建てバスが目を引く中心部は、一般の車の乗り入れに税金を課して渋滞緩和を図っているなど、うまく政策誘導していることに感心しました。

一方、地下鉄の清潔さや時刻通りの運行、食文化、物価などの面は日本の良さを改めて実感するなど、多くの発見があり、とても有意義で楽しい旅でした。(ちなみに旅費は自費で行きました。)

港ユネスコ協会でも国内外への見聞を広める多くの催しが用意されています。「百聞は一見に如かず」です。さあ出かけましょう！

(港区議会議員)

2014年12月1日発行 第138号

ユネスコ精神と「持続可能な社会」の構築

港ユネスコ協会相談役 木曾 功



ユネスコのミッションは、世界平和の維持とその基礎となる教育、文化、科学等の普及であるが、このことと「持続可能な社会」の構築という課題について考えてみたい。

私が、七年前、日本ユネスコ国内委員会の事務総長になった時、ユネスコ活動の活性化をどう図っていくのかという課題が、さかんに議論されていた。各地のユネスコ協会のメンバーの高齢化と、若いメンバーの参加が減ってくるという事態にどのように対処すべきなのか？ 実際に、小学校・中学校等で子ども達と話しをしてみれば分かるが、残念ながら今の子ども達にとって、平和は「あたり前のこと」であり、平和の尊さは、抽象的かつ「何か遠い価値」でしかないと思われる。

世界で、いまだに紛争が続いているが、テレビ等で見る「遠い世界」のことと考えているようである。

一方で、気候温暖化の問題をはじめ、地球環境の悪化に関しては、非常に関心をもっていることが分かる。

ユネスコが取り組んでいる「ESD」(持続的開発のための教育)が、もっと日本の教育現場で推進さ

れる可能性があるのではないかと考えた。

そして、この切り口でユネスコ精神と活動の活性化が図れるのではないかと考え、ユネスコ・スクール 500 校計画と、そのユネスコ・スクールが、「ESD」（持続的開発のための教育）の地域の拠点として活動することを期待した。

現在、我が国のユネスコ・スクールは、800 校を越え、増加中である。

私は、世界の「平和」を維持するには、地球社会が「持続可能な社会」となることが大前提と考えている。方向性は同一であり、「ESD」が新しいユネスコ活動の一つの柱になることを期待している。

(官房参与 前ユネスコ代表部大使)

2015年3月1日発行 第139号

忘れえぬ一夜 in サウジアラビア

港ユネスコ協会 理事 友金 守



「旅は道連れ、世は情け」これは今なお国内でも、海外でも営々と生きていると思う。旅では、新しい出会いと発見が生まれる。旅は一期一会の積み重ねだ。

今年1月、過激派組織「IS イスラミックステート」による日本人人質事件のショッキングな報道を目にした時、40年近く前のサウジアラビアでの一夜の出来事が鮮明に蘇ってきた。かかる時勢のなか、中東で感動した思い出を書くには少々ためらいがあり、しかも、ずい分昔の話なので恐縮ではある。が、私の30余年にわたるサラリーマン生活の中で、心に残る貴重な体験の一つなので、披露させていただきたい。

1976年5月。当時の私は、現役の会社人間。若さに任せて、「伸ばせ貿易、豊かな日本」精神のもと、海外にも度々出かけていた。その時期に、サウジアラビアで起こった小さな出来事である。

バハレーンで乗り換え、サウジアラビアのダーランを経由して、サウジアラビアの首都ジェッダへ飛ぶ予定だった。ダーラン空港に私の体は無事到着したが、預けた荷物が到着していない。乗継のフライトの時刻は迫ってくる。どうしよう！ フロントにかけつけたところ、分かったのは「荷物は積み残された」ということだった。やっと荷物が到着したのは、乗継便が飛び立った後だった。

夜になり、薄暗い空港のベンチで、翌朝事務所の開くのを待つしかないと思いを抱えていた。その時、1人の男性が話しかけきた。事の詳細を話したところ、彼が「自分の車でホテルを捜しに出かけよう」と言ってくれた。訪れた5カ所のホテルはどこにも空室がなく、途方にくれてしまった。しばらくすると、彼が「俺が怖くないか？」と尋ねた。即座に、「信頼しているよ。」と答えた。すると彼の顔が和ら

ぎ、自宅へ招いてくれるという。彼の家に着くと、すぐに、焼き飯風の食事を用意してくれた。習慣上、奥さんは出てこない。ベッドとして、応接間の長椅子と、新品の毛布を提供してくれた。

お蔭で翌朝のフライトの予約もでき、朝、車で空港まで送ってくれた。固い握手をかわし、笑顔で見送ってくれた。明るい気持ちで訪問地ジェッダ空港に到着し、取引先の社長の出迎えを受けることができた。

3週間後に帰国し、すぐにお礼の電報を打ち、お礼の品を送付した。

あれから 40 年近く経った今もなお、見ず知らずの日本人の面倒を見てくれた彼の親切が忘れられない。時代が良かったのだろうか？

もし、成田空港で困っている旅行者がいたら、果たしてあそこまで親身に世話をすることができるかと、問われれば、恥ずかしながら、「ノー」である。

日本の「おもてなし」。果たして、あのサウジアラビア人のように、心をこめてできるだろうか。

2015年6月1日発行 第140号

価値観の多様化と共生

ユネスコ協会 理事 峰尾茂克



厚生労働省が平成 26 年 7 月に発表した平成 25 年簡易生命表によると、男性の平均寿命は 80.21 年、女性は 86.61 年。90 歳まで生存する割合は、男性は 23.1%、女性は 47.2%となっている。

また、内閣府の平成 26 年版高齢社会白書によると、我が国の総人口は平成 25 (2013) 年 10 月 1 日現在、1 億 2,730 万人。総人口に占める 65 歳以上人口の割合（高齢化率）は過去最高の 25.1%（前年 24.1%）となっている。

上記資料からも明らかなおり日本は超高齢社会である。

一方において、総務省『国勢調査』によると、年齢別未婚率（2010 年）は、男性は 25 歳～29 歳で 71.8%、30 歳～34 歳で 47.3%、35 歳～39 歳で 35.6%。

女性は 25 歳～29 歳で 60.3%、30 歳～34 歳で 34.5%、35 歳～39 歳で 23.1%となっている。

このように、25 歳から 39 歳の未婚率は、男女ともに上昇傾向になっている。

今後の少子化の懸念や世代間扶養の考え方に成り立つ年金制度への懸念、生産年齢人口減少への懸念等は、今後の日本の課題として、よく知られたことである。

見方を変え、価値観の多様化という点に言及すれば、今後日本は超高齢社会ならではの世代間における価値観の相違やライフスタイルの変化による価値観の多様化に益々直面する時代になることが予想される。

価値観が多様化し、他の価値観を認めることは、国際交流にも通ずるところがある。他の価値観を認めるということは決して他に迎合することではなく、自己の存在を確立した上で、他を認めることではないかと私は思う。つまり共生である。

日本には今まで引き継がれてきた古き良き伝統や文化がある。私は最近日本の良き伝統や文化が価値観の多様化や時代の変革とともに失われつつあるような気がしてならない。人と人との交流についても然りである。

2020年にオリンピック・パラリンピックが開催される。現在、円安の効果もあり日本への海外からの旅行者が増えているという。

思えば、速いもので、私がユース活動委員会で活動していた時から25年ほどが経過した。

日本の良き伝統や文化を真の意味で海外の方に伝えていくことができるかどうかを改めて自問自答してみたいと思う。

2015年9月1日発行 第141号

あの頃、この頃

港ユネスコ協会理事 清水軍治



昭和27年(1952年) 大学へ進学した頃アコーディオンに出会った。その音色に魅せられ、独学でマスターして、以来60年。

プロ奏者にもなれずに、今日まで来てしまった。

あの頃・・・銀座にネオンの灯がともる頃、小さなクラブの店で、酔客の求めに応じてハヤリ歌を弾いていた。華やかなキャバレーの楽屋で、客からもらったチップをそのまま「坊や、ラーメンでも食べなさい」と私の手に握らせてくれたキレイなホステスのお姉さん。私は屋台のラーメンをすすりながら、彼女に恋をしてしまった。また、新宿、渋谷にあった歌声喫茶「カチューシャ」や「ともしび」にも出演した。

時が移り、エレクトーン等の電子オルガンが出始めて、プロのアコーディオン奏者が次つぎ、失職していった。もし、私がプロ奏者になっていたら、毎日の生活はドン底であったに違いない。

あの頃・・・昭和54年(1979年)、港区教育委員会から「ユネスコ協会設立準備に参加して欲しい。」との要請があった。参加したものの、故丹下健三初代会長、三輪公忠前会長などの間で小さくなって、

ここは、私の「泳げる池」なのだろうか？と躊躇していた。

その後も、ディプロマツツ・レクチャー、国際シンポジウム等の英語を使う催しには出席できなかった。

世界の料理教室、新入会員を囲む会、みなと区民まつり、MUA サロン、UNESCO ユースフォーラムなどには、自分なりに、楽しみながら参加してきた。

創立 30 周年記念特別事業「歌と踊りで世界をめぐる」で実行委員長をさせてもらったのが、私の副会長としての最後の「仕事」だった。プログラムには 8 団体が参加してくださった。

・・・インターナショナル・セカンダリー・スクール、東京インターナショナルスクール、「父と子のバグパイプ」、テンプル大学、ブルガリアの民謡と楽器演奏、韓国伝統舞踊、ラテンアメリカの歌と踊り、白門グリークラブの男声合唱。・・・

もう 4 年も前になるが、今も頭の中に、あの歌や踊りが、色鮮やかに蘇ってくる。参加団体を紹介し、運営に参加して下さった皆様に感謝で一杯だ。

長い間、常任理事会では「言うは易し、実行は成り難しだ」と、喧々諤々話し合ってきた。あの頃のことは懐かしく思うが、少しずつ遠くなってきた。

ボランティア団体、国際交流団体が林立する中で、これからの協会はユネスコ精神を守りながらの、特色ある活動にあると思う。時の流れは速く、時勢の変化も速く、対応が大変だろうと思う。どうぞ、会長を中心に、役員や会員の皆様、頑張ってください。

今日この頃・・・高齢者施設への慰問や、依頼を受けての歌声喫茶での伴奏と司会に時間を過ごしている。83 歳ながら元気で、アコーディオンを弾きながら、殆どが 70 歳代の方がたと一緒に、大きな声で歌う喜びを共有できる幸せに感謝しています。

これを、残された人生の生き甲斐としている。

“歌は世界共通の言葉” さあ、歌いましょう。

2015 年 12 月 1 日発行 第 142 号

港ユネスコ、人との出会い

港ユネスコ協会 理事 鈴木明美

港ユネスコ協会創立記念式典が 1981 年 10 月 17 日、白金・迎賓館（現・東京都庭園美術館）で催された時に、ある方からお誘いいただき、参列しました。

あの時から現在まで 34 年間、出会った方がたから、どれだけ多くの影響を与えていただいたかしらと、思い出しています。



当初、「無」のところから出発したので、会員は、いろいろな事柄に関わり、いろいろな方がたと交流しました。ブレティン発行、発送には、当時港区役所の一角をお借りして、力を合わせた経験もありました。

創立後の3年間、新年には、「日本のお正月を外国人に紹介する会」として、みなと幼稚園などをお借りし、お餅つきや、いろいろな正月行事を紹介しました。お雑煮を作って、皆さまにふるまったのが、後々の、今の料理紹介につながっているのかもしれない。

その後、新年会はニューイヤーズパーティとなって、葵会館や芝浦の弥生会館へと続きました。一般の参加者も多く、高校生のボランティアも交え、盛会でした。食事をご一緒に楽しむことは交流には大きな役目を果たします。

今、私は世界の味文化を紹介する委員会に所属しています。講師はほとんどがそのお国の方がたです。オリンピック開会式の入場で耳にする遠い見知らぬ国の方とも親しくさせていただきます。

料理開催日までの数カ月、わくわくしながら準備を進めます。お国の料理を習うのは勿論のことですが、思わぬ知識を与えていただきます。

思い出に残る出会いの1つに、ギリシャからの留学生が料理の講師をして下さったことがありました。お母様から教わった料理をして下さるのですが、ご自分も不安、しかも材料を日本の何処で買ってよいかわからず、我々スタッフも手探り状態でした。

当日、サプライズがありました。学校の先生をしておられるお母様が、「ちょうど休暇期間になったので」と、日本にいらしたのです。教室が大成功だったのは申すまでもありません。帰国後もお互いに感激を分かち合いました。

今、人は気忙しく生活していて、人と会っても、気持ちを合わせる事が少なくなっているように感じます。

内外を問わず、「人との出会い」を大事にすることこそ、人間を豊かにするのではないのでしょうか。

2016年3月1日発行 第143号

港区と私

港ユネスコ協会理事 三輪 恵美子

70年前に終わった第二次世界大戦が過ぎて、八十路（やそじ）を半ば近くまで歩み続けてきた私は、人生の大半を港区で過ごしてきた。

勿論、戦争中の大半も、港区で育った。戦前の家の近くの地図は今でも細かく描ける位、私は当時の

家の近所の地図、家々、人々のことを、はっきりおぼえている。

戦時中、当時のはどかな町並みであった住宅街が、ある日突然、町会からのお達しで、「空襲で焼ける前に、住宅密集地は、強制的に壊すように」との回覧板が廻ってきた。

若い男性達は戦争に行ってしまうと、働き手も少ない戦時中のこと、空襲で母校は焼失し、学校もお休み中、中学校に入ったばかりの年の私もかり出され、毎日、埃まみれになって、近所の木造家屋や立派な鉄筋の洋館を、鳶口を持って、モンペ姿にマスクをして、一日中かかって、ひたすら壊した。壊すのも決してやさしいことではなかった。四本柱が立っているお手洗いなどは、頑丈で、なかなか壊れなかった。子供ながらに、こんな立派な鉄筋の家を壊すなんて、勿体ないと思つづく思つた。



その一角は、以前、長い間私が生まれ育った家のすぐ近くにあり、ここ半世紀は、今は亡き菓屋さん・町会長でもあった方の発案で、桜の木が植えられた。今ではすでに老木になって、町の立派な公園として、あたかも何の歴史も知らぬかのように、春夏秋冬、近所の人々の平和の象徴の憩いの場として、存在している。現在、周りに住む多くの人々は、おそらく、何も知らないであろう、戦時中の港区の一角の強制疎開の話である。

その後、空襲がひどくなり、私自身は数か月港区を離れ、疎開をした。家は運よく焼けずにすみ、終戦後、また、港区の家に戻った。出征して、どこに行かされてしまったかわからなかった父も、戦後1年経って、幸い無事帰還した。

私は幸か不幸か、戦前・戦中・戦後、曾祖父の時代から、現在に至るまで、教育を受けた学校もすべて、この港区である。

結婚して、主人の関係で、数年海外に行くことはあっても、日本の住み家は、常に同じ港区である。

何時の頃からか、家の周囲には、高層住宅が建ち並び、住宅地の住所も変わり、便利であった都電もすっかり姿を消して久しい。時々、もしも父母が私の家を今、探して帰ってくるものがあつたら、どうやって見つけられるであろうかと思う。

高速道路も知らず、とっくに他界してしまった父母、仲良しであった近所の友人たち、この先、この地球は、どのようになって行くか、何が起こるか、全くわからない昨今、コンピューター、スマホに明け暮れている現代の若者たち、幼い子供たちの次の世代が、平和であることを、ひたすら祈る。

港ユネスコ協会の会員とならせていただいている私は、これからの残された僅かな年月を、港区で、平和のうちに、皆様とご一緒に学び、楽しく過ごせることを、心から感謝し、幸せに思っている。

新任のご挨拶

港ユネスコ協会 会長 永野 博



このたび、丹下健三初代会長、三輪公忠第二代会長、高井光子第三代会長という大きな貢献をなされた方々のあとを継ぎ、港ユネスコ協会の会長を務めさせていただくこととなりました。

これまでの会長の成し遂げてこられた基盤の上に協会のさらなる発展につとめていきたいと願っております。

私は、もともとは科学技術庁という理科系官庁の出身で、ユネスコ運動との縁はありませんでしたが、たまたま文部科学省の成立後、日本ユネスコ国内委員会事務総長の任につきました。

この仕事はパリのユネスコ本部と我が国の草の根運動である民間ユネスコ運動を結びつけることを任務とし、私にとりましては上意下達の精神の消えない日本にあって、現場で活動する方々と接する新鮮な驚きがありました。

その一環として栃木県で開かれた関東ブロック研究会に出席する機会があり長門芳子理事にお会いしました。これが、私が港ユネスコ協会に参加する遠因ともなりました。

「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない。」で始まるユネスコ憲章は戦争直後の日本の人々の心を大きく揺り動かしたに違いありません。

国連加盟の5年前、そもそもサンフランシスコ講和条約の署名よりも前の1951年6月にユネスコに加盟したという事実は、いかに当時の多くの日本の人々が平和のもとに新しい日本を築いていこうとしたかをうかがい知ることができます。

時代は変わりましたが、欧州における冷戦終結後の世界は、単なる政治、経済の変動ではすまない国際的な不安定感の拡大を招きつつあります。

一方、港区は東京の中心にあって、オリンピックも一つの契機として国際都市東京の中核に位置することになります。都市の発展はそこに住み、活動する人々が気持ちよく暮らすことができるかどうかにかかっています。

港ユネスコ協会でも「平和」を核とした若者の交流など、多くの課題があるように思えます。このような状況に直面し、微力ではありますが新たな職責に挑戦していきますので、皆様のご協力、ご支援を心よりお願い申し上げます。

北極点への旅

港ユネスコ協会 理事 森村俊介



2014年7月15日から、ロシアの北極圏のムルマンスク（モスクワから北へ約2000km、北緯68度58分、東経33度05分）から、砕氷船「50イヤーズオブビクトリア号」に乗って北極点へ到達するという、11日間の旅に参加した。

3日目から氷をバリバリと砕きながら極点まで進む。たいへんな迫力である。この醍醐味は他では味わえない。これを味わうために乗船するという人もいた。

食事はとても良く、毎日メニューが変わり、肉か魚かを選べる。バイキングもあり、おでんや蕎麦も出た。食べ過ぎて太ってしまった。毎日の講演タイムは、北極点までスキーで行った女性の話や、シロクマ、鯨、そして、通過するフランツ・ヨーゼフ諸島の説明など、多様で飽きなかった。ゾディアックボートに分乗して2つの島にも上陸した。

北極点・北緯90度に到達。船から降りて、そこで食事をし、志願者は冷たい北極海に入れることになった。西洋人10名ほどと、日本人メンバーの最年少の40代の女性2人が志願した。これは負けないと思い、私も（マラソンをしているので心臓には自信があるので）海水パンツになり、水中へ飛び込んだ。膝から下がびくびくとなったのですぐに上がったが、しばらくは裸でいてもそんなに寒くならなかった。ウォッカは海へ入った人のみがもらえ、多く人から称賛してもらい、表彰状までもらったのは嬉しかった。

雪景色の中のシロクマは（北極点近くにはさすがにいなかった）素晴らしかった。アザラシ、セイウチ、ザトウ鯨にも会うことができた。

ここまで来るような人は、私以上に旅好きで、マニアックな人たちであり、世界中を旅しておられる。日本人50人の中では私はおそらく若い方から5番目であったが、年配の方がたの旅の経験話にはびっくりした。170か国訪れている人、国連加盟193か国全部の訪問を計画している人。南極には8割の人が訪れており、北極は2回目という人が数人もいる。

僻地の国だけを訪れるツアーがいろいろあるそうで、参加者も少なくないと聞いた。旅に熱中する日本人がいかに増えているかをあらためて感じた。

今回の旅には25人の中国人が参加していたが、全員が若い。50歳前の夫婦で子供連れが数組、つまり、家族で1千万円払うのは平気なのである。船内で行われた品物のオークションでも、日本人客が嫉妬するほどの競りぶりであった。また、この次の航海には、中国人が80人参加するとも聞いた。この旅に参加したことで、中国人の恐ろしいまでのお金の使いぶりや裕福さをじかに知った次第である。

文化財はなぜ大切なのか？

港ユネスコ協会 副会長 宮下ゆかり



11月初旬、奈良の飛鳥路を訪ね、お寺や遺跡を見て回りました。青空の下、田んぼや畑の中を縫ってレンタサイクルのペダルを踏むのは爽快でした。

飛鳥路の魅力は、のんびりした田園風景と、謎に満ちた多くの遺跡です。例えば「石舞台古墳」は、誰のお墓なのか？何故石室がむき出しなのか？何の用途に使われたのか分からない遺跡もあちこちにあります。

最も印象に残ったのは、高松塚古墳でした。壁に描かれた飛鳥美人たちは色鮮やかで、その服装は高句麗古墳のものに似ているそうです。四神は古代中国の思想に基づく一方、日本独自の画風も見られるとか。

当時のご先祖様たちは、中国大陸や朝鮮半島からの文化や技術に触れて驚き、尊敬し、模倣し、吸収しつつも、一方で徐々に自分流に代える努力もあったのでしょう。盗掘があったにもかかわらず、これらの文化財が残されていたことは幸運でした。

壁画つながりで思い出すのは、アフガニスタンのバーミヤン遺跡です。2001年3月、無残にも崩れ落ちるバーミヤン大仏の映像は世界に大きな衝撃を与えました。タリバーンが「偶像崇拜はイスラム法に反する」として大仏を破壊したのです。東西二つの大仏と共に、壁画も失われました。破壊した人たちにとって、約1,500年前に作られた文化遺産は何の意味もなかったのでしょうか？

日本でも昔、このような文化破壊行為がありました。明治元年に「神仏分離令」が出され、これによって各地で廃仏毀釈が行われたのです。

奈良の興福寺も大きな打撃を受けました。五重塔が25円（現在の価格で約10万円）で売られたという話も伝わります。買い手は装飾の金具が目当てで、木材は薪にするつもりだったが、解体費用が高いと知ると焼却処分しようとし、類焼を恐れた近隣住人の反対で、五重塔はかろうじて今日まで残されたのだそうです。

現在では、こんな無茶は出来ません。時代が変わったと言えはそれまでですが、なぜ文化財は大切なのでしょうか？なぜ私たちを惹きつけるのか？皆様と一緒に考えたいと思います。

私のささやかな国際交流

港ユネスコ協会 副会長 奥村 和子



2016年5月、旅仲間四人で中部イタリア（フィレンツェ～アレツォ～モンテルキ～ペルージャ～アッシジ～アスコナ等）の街歩きを楽しみました。仲間の一人がピエロ・デラ・フランチェスカ（15世紀のイタリアルネッサンスの画家）の絵に憧れて、今回は是非！と提案し、皆も「目的のある旅」に賛成し即、実行となりました。旅の2日目はフィレンツェからボローニャに日帰り足で足を延ばし、11世紀に創立されたヨーロッパ最古のボローニャ大学の解剖学の階段教室や当時の蔵書に歴史の重みに感動しました。

3日目からいよいよ目的の絵画巡りです。アレツォのサン・フランチェスコ聖堂の壁画「聖十字架伝説」はソロモンとシバの女王も登場する大作で見応え十分でした。翌日、アレツォから市バスで小村のモンテルキ迄行く予定のところ停留所を見逃し、かなり遠くまで乗り越し、やむなくタクシー利用となりました。小さな美術館の中、正面に飾られた「出産の聖母」それは美しいブルーの衣装の聖母に二人の天使が寄り添う絵に、皆、心を打たれたまま美術館を出ました。

丘の上にある美術館からは帰りのバス通りすら見えません。そこへ犬を連れて散歩中の上品な婦人が通りかかり、思わず習いたてのイタリア語で道を尋ねました。どうにか通じてバス停まで一緒に歩いて頂きました。道すがら日本に旅されたこと、デラ・フランチェスカの絵は村の誇りである等笑顔で語られました。彼女の故郷への愛着が伝わりました。バス停に着くと小さな雑貨屋がありました。店のマダムに行先を伝えると、心配げに時間をチェックして下さり、バスが到着する迄そばに居て下さいました。行きかう人も僅かな小さな村で大きな幸せに出会いました。

今迄もほぼ個人旅行のため、訪問国では色々な方に助けられてきました。港ユネスコ協会に志している国際交流とは程遠いかもしれませんが、日本からの観光客への「優しさ」は自然に出るもので、感謝の気持ちで一杯です。私たちも日本で困っている旅行者にお会いしたら親切にする事を心掛けています。それがお礼につながると話しています。

全く海外旅行に関心の無かった私がこうして何度も旅行に行くきっかけは、初めて経験した主人の赴任先の南アフリカ共和国での二年弱の生活体験かも知れません。当時はアパルトヘイト政策時代であり、学校で習った知識を遥かに超える衝撃はありました。日本で得た情報と現地での実情がいかに異なるか、そして時折、イエローとして人種差別を膚で感じたものです。そこから私は国際交流への関心が深まった気がします。

常に語られる「百聞は一見に如かず」の言葉通り実体験は本当に貴重なものと思っています。旅をする度に色々体験し、感動を重ねてきました。そして旅先で戴く親切はそれにもまして心に蓄積されてきました。今後も「見て！感じて！知る！」をモットーに旅をしていきたいと思えます。

SDGs（持続可能な開発目標）の実現へむけて

港ユネスコ協会 会長 永野博



世界は第二次世界大戦後 70 年を経て国際的な平和を目指した協調の動きから、分散の方向に向かうかどうかというターニングポイントにさしかかっている。英国の EU 離脱、トランプ大統領の米国第一主義のような先進国での動きばかりでなく、トルコでの大統領への権限集中などもその動きを物語っている。

それでも現在、世界を一つの目標に向けて動かすような理念がある。それは 2015 年秋の国連サミットで採択された 2016 年から 2030 年にわたる「持続可能な開発目標」(SDGs) である。

じつは国連では 21 世紀に入り、世界が挑むべき目標として 2 つの大きな活動を実行してきた。一つは、途上国の貧困の撲滅を主たる目標とした「新世紀開発目標」(MDGs) (2001~2015 年) であり、もう一つは、そもそも日本が提唱した「持続可能な開発のための教育 (ESD) の 10 年」(2005~2014 年) である。これら 2 つの活動実績を踏まえて策定された SDGs は 15 年間の行動目標として、「貧困をなくそう」、「働きがいも、経済成長も」、「気候変動に具体的な対策を」など 17 の目標と 169 のターゲットを示している。

SDGs と MDGs との大きな違いの一つは、途上国ばかりでなく、先進国の行動も対象とする点にある。多くのターゲットが示されていることから、SDGs の実現においては、各国における創意工夫が求められている。

そこで重要となるのが教育である。「質の高い教育をみんなに」として、教育は SDGs の第四の目標となっているが、教育の内容は 17 の目標すべてを包含する。



わが国はユネスコとタイアップし ESD を世界でリードしてきた実績を有し、そのための拠点となる全国各地の小中高等学校からなるユネスコ・スクールも 1,000 校を越えたところである。まさに我が国では SDGs の実現を草の根レベルから考えることのできる基盤が整い、若い世代が日本の、さらには地球全体の持続可能性について思いをはせることのできる環境が整ってきた。このような草の根的活動の活発化と政府の施策があいまって、わが国から世界をリードする SDGs についての考え方やその実行方策が生み出されることを期待したい。

港ユネスコ協会でも SDGs の実現に向けて何ができるかを考えていく必要がある。

「会津」から港ユネスコへの思い

常任理事 渡部俊子



私は今、福島県の湯川村と言う会津盆地の中心に位置する所、過大な表現だと日本のお臍にあたるような場所に住んでいる。現在、月の半分位は三郷と会津を行き来している。私が往来のスケジュールを調整する一方、主人は永年三郷に仕事の基盤があるので、事務所にはリタイアするまで居るとのこと。この事務所には居住空間が有るので、三郷に来た時はとても助かる。では、何故会津にいるのか？長年私の港ユネスコ協会（MUA）におけるボランティア活動へのよき協力者・理解者であり、仕事も頑張ってきた主人に感謝の気持ちも含め、暫定的な定年後（個人事業者なので定年無し）の選択権を与えたところ、自分の理想郷として選んだのが会津であった。要は「田舎暮らし」をしたいのだ、と思った。私は最初躊躇したが、何回か車で行き来してみて3時間程度の移動で済むと判ったので、これならいいかなと思い始めた。元々、家庭菜園が好きなので、年齢と共に思いが強くなり趣味が高じたのだと感じた。また、会津という場所は四方八方を山に囲まれており、東に磐梯山、西に駒ヶ岳、南に茶臼岳、北に飯豊山を望み、四季折々の風景が美しい。秋になると帰宅途中、稲を刈った後の田んぼに白鳥が群れをなして落ち穂拾いしている姿が見え、何とも愛らしく毎年楽しみにしている。

2011年3月11日、あの日、「東日本大震災」が東北を襲った。その時、娘の家族は仙台の青葉区におり、暫く連絡が取れない状態であった。それは殆どのひとが一斉に携帯を使用したため、回線が飽和状態になったことが原因であった。その後、やっと安全の確認がとれ、何日か後に娘から、一般のひとは通れない被災地海岸沿いの様子を写した携帯ビデオが送られてきた。想像もできないような悲惨な光景であった。日本ユネスコ協会連盟は、「3.11」被災者救援のため「東日本大震災子ども支援募金」を立ち上げ、MUAでは各事業を実施する度に募金箱を用意しコーアクション活動を行ってきた。震災は町や施設ばかりでなく家族をも破壊した。残された子どもたちの将来を考えると、MUAの募金活動は今後も続けて行かなくてはならないと思う。

その後、日本では熊本地震も起きたが、世界的にゲリラ豪雨、台風の巨大化、海水温の上昇がみられ、もう地球が悲鳴を上げており、地球温暖化が益々ハイスピード化しているようで不安になる。これから成長していく子供達のためにも、「ストップ・ザ・地球温暖化」の運動を進めて、大人として、また同じ地球人として、自分にできる役割を果たして行かなければならないと感じている。

私が初めてMUAのニューイヤー・フレンドシップ・パーティーに参加したのは1987年であった。場所は葵会館だったと記憶している。MUAのある港区は大使館や外資系の企業が多く、異文化に触れる機会に溢れた特色のある区だと感じた。パーティー会場での懇親会では、会員と一般の方や国際色豊かな外国籍の方々との交流が行われ、とても家庭的なよい雰囲気であった。そのため、その場でMUAに家族会員として入会した。

私が参加した国際交流委員会は、後に国際理解講座委員会へと名称が変わり、数多くの貴重な講演会を開催してきた。委員会メンバーの会議は夜に事務局で行われるが、軽食の「おにぎり」を食べながら、

和気藹々とした雰囲気の中で、各事業について真剣な意見が交わされる。学識ある意見にも触れ、とても勉強になった。楽しい時間はあっという間に過ぎ、21時の閉館時間がきてしまう。帰りに皆でお茶などしてから帰途につくと、武蔵野線は終電の一本前になってしまい、帰宅が24時近くになることもあった。

私はボランティア活動においては、奉仕の心、平和を願う心、人は誰でも平等な権利を有すると思う心が大事だと思っている。ユネスコ活動を通して、微力ながら世界平和の実現に貢献できるよう、今後とも関わって行きたい。

2017年12月1日発行 第150号

「世界遺産」とは

港ユネスコ協会 常任理事 小林 敬幸



「世界遺産」とは？・・・旅行で訪ねたくなる魅力の地ということだけなのだろうか？「1960年代アスワンハイダムの建設時、UNESCOはナイル川流域にあったヌビア遺跡を水没から守るために移築して保存するキャンペーンを張った。この時に“人類共通の遺産”という世界遺産条約の基本的な考え方ができ、1972年『世界遺産条約』の採択へとつながった。」と西村幸夫氏(東京大学大学院教授、国際遺跡記念物会議<イコモス>元副会長)は、この10月のユネスコ運動関東ブロック大会で「平和を目指す世界遺産・未来遺産」と題した基調講演を切りだされた。

なるほどとの思いからその前段階を調べてみた。19世紀半ばに生まれた国際赤十字の「戦争という負の体験で文化遺産の破壊を目の当たりにし、それを禁止した。また傷ついた兵士は人道的見地から敵味方なく救済されるべきである」という思想を「文化遺産の保存」の考え方で広げることになった。しかし、第二次世界大戦で一部の歴史都市は戦争被害を守るルールが生かされはしたものの、多くの文化遺産が深刻な破壊を受けた。その後1945年11月に「国連教育科学文化機関：UNESCO」が設立された、ということが分かった。

昨年我々港ユネスコ協会(MUA)では、アフガニスタン文化研究所所長・前田耕作氏による「アフガニスタンの世界遺産～バーミヤンの昔と今～」と題した講演会をもった。玄奘三蔵も見た7世紀の「西大仏・東大仏」が2001年の内戦で破壊されてしまった。その後ユネスコとアフガニスタンで文化遺産の保護修復、又そこから流出した文化財を平山郁夫画伯・東京藝術大学学長(当時)の指導のもと大学で修復。2016年末には母国に戻すという、「文化財」を守っていく一連のお話をお聞きし、氏の熱意に心打たれた。

この5月のMUAは、東京初の世界文化遺産 ル・コルビュジエの建築作品「国立西洋美術館」を訪ね、「松方コレクションと西洋美術館」と題して、館の主要なるコレクションのお話を伺うことができた。個人的には、この秋に東京藝術大学大学美術館で開催された「シルクロード特別企画展～素心伝心～クローン文化財 失われた刻の再生」を鑑賞し、前田耕作氏を含む多くの方々の労苦の集大成に感動。失われたものの復元、そして劣化を懸念しての再現。その為に今日の科学的技術と芸術的技能を融合しての「クローン文化財」の技術を開発。地球財産を地球レベルで考えて行こうと世界に発信した画期的な美術展だった。

「世界遺産」は、文化遺産、自然遺産、そして複合遺産と3つの種類がある。その中でも「世界文化

遺産」は、それを生み出した民族や原所有国、現在の所有国などの個別の組織や団体の所有物であることを超えた“ユニバーサルな価値”を持つものである。「国際社会 international community」といった表現でなく、「世界のすべての国民 all people of the world」という考え方から成り立つ地球規模の思想であるということを理解できた。

日本ユネスコ協会連盟の活動内容は、ユネスコ憲章に則り「平和」を希求し、発展途上国への教育支援としての「世界寺子屋運動」、世界遺産を守る「世界遺産活動」、日本の文化・自然を守る「未来遺産運動」を柱としているが、その背景には2016年から2030年にわたる「持続可能な開発目標」(SDGs)の追求あつての活動である。

私自身ユネスコ活動の日は浅いが、多岐にわたる「ユネスコの活動」の中、「平和」を考える道筋として同好の仲間を誘い、「有形・無形の世界遺産」の一つひとつを身近なところから触れて、その文化と歴史を理解していくことが大切だと考える今日この頃である。

「世界遺産」とは?・・・旅行で訪ねたくなる魅力の地ということだけなのだろうか?「1960年代アスワンハイダムの建設時、UNESCOはナイル川流域にあったヌビア遺跡を水没から守るために移築して保存するキャンペーンを張った。この時に“人類共通の遺産”という世界遺産条約の基本的な考え方ができ、1972年『世界遺産条約』の採択へとつながった。」と西村幸夫氏(東京大学大学院教授、国際遺跡記念物会議<イコモス>元副会長)は、この10月のユネスコ運動関東ブロック大会で「平和を目指す世界遺産・未来遺産」と題した基調講演を切りだされた。

なるほどとの思いからその前段階を調べてみた。19世紀半ばに生まれた国際赤十字の「戦争という負の体験で文化遺産の破壊を目の当たりにし、それを禁止した。また傷ついた兵士は人道的見地から敵味方なく救済されるべきである」という思想を「文化遺産の保存」の考え方まで広げることになった。しかし、第二次世界大戦で一部の歴史都市は戦争被害を守るルールが生かされはしたものの、多くの文化遺産が深刻な破壊を受けた。その後1945年11月に「国連教育科学文化機関: UNESCO」が設立された、ということが分かった。

昨年我々港ユネスコ協会(MUA)では、アフガニスタン文化研究所所長・前田耕作氏による「アフガニスタンの世界遺産～バーミヤンの昔と今～」と題した講演会をもった。玄奘三蔵も見た7世紀の「西大仏・東大仏」が2001年の内戦で破壊されてしまった。その後ユネスコとアフガニスタンで文化遺産の保護修復、又そこから流出した文化財を平山郁夫画伯・東京藝術大学学長(当時)の指導のもとで修復。2016年末には母国に戻すという、「文化財」を守っていく一連のお話をお聞きし、氏の熱意に心打たれた。

この5月のMUAは、東京初の世界文化遺産 ル・コルビュジエの建築作品「国立西洋美術館」を訪ね、「松方コレクションと西洋美術館」と題して、館の主要なるコレクションのお話を伺うことができた。個人的には、この秋に東京藝術大学大学美術館で開催された「シルクロード特別企画展～素心伝心～クローン文化財 失われた刻の再生」を鑑賞し、前田耕作氏を含む多くの方々の労苦の集大成に感動。失われたものの復元、そして劣化を懸念しての再現。その為に今日の科学的技術と芸術的技能を融合しての「クローン文化財」の技術を開発。地球財産を地球レベルで考えて行こうと世界に発信した画期的な美術展だった。

「世界遺産」は、文化遺産、自然遺産、そして複合遺産と3つの種類がある。その中でも「世界文化

遺産」は、それを生み出した民族や原所有国、現在の所有国などの個別の組織や団体の所有物であることを超えた“ユニバーサルな価値”を持つものである。「国際社会 international community」といった表現でなく、「世界のすべての国民 all people of the world」という考えから成り立つ地球規模の思想であるということを理解できた。

日本ユネスコ協会連盟の活動内容は、ユネスコ憲章に則り「平和」を希求し、発展途上国への教育支援としての「世界寺子屋運動」、世界遺産を守る「世界遺産活動」、日本の文化・自然を守る「未来遺産運動」を柱としているが、その背景には 2016 年から 2030 年にわたる「持続可能な 開発目標」(SDG s)の追求あつての活動である。

私自身ユネスコ活動の日は浅いが、多岐にわたる「ユネスコの活動」の中、「平和」を考える道筋として同好の仲間を誘い、「有形・無形の世界遺産」の一つひとつを身近なところから触れて、その文化と歴史を理解していくことが大切だと考える今日この頃である。

2018年3月1日発行 第151号

日本のテロリズム、アメリカのテロリズム

そしてテロリズムの戦争と世界平和

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪 公 忠



地下鉄サリン事件があつた時、「テロ」という言葉は聞かれなかつたと思う。しかしアメリカではすぐそれを「テロ」と呼んだ。アメリカで日常語である「テロ」は日本ではふつう使われていない言葉だったのである。

アメリカでは早くからオウム真理教のことを政権奪取を狙うテロリスト教団とみていた。彼らの手段がロシアから手に入れたサリンだということも把握していた。日本の治安当局だってそれくらいは承知していてもおかしくない。だが巷の常識との隔たりは大きかつた。テロリスト集団が身近にいることも知らずに、平穏に暮らしていた。そこに地下鉄サリン事件が突発した。「テロ」が起つたのである。

試みに手元にある古い『広辞苑』を覗いてみる。昭和 30 年版である。見出し語として「テロ、テロリスト、テロリズム、テロル」があることを知る。「テロル」とは「あらゆる暴力手段に訴えて敵方を威嚇すること。テロ」とある。

ちょうど長い年月をかけたオウム裁判が結審したばかりで、新聞で整理された情報を読むことが出来る。例えば『日本経済新聞』の 1 月 30 日、31 日、そして 2 月 1 日の上、中、下の連続記事を見ると、先ず 1989 年 11 月に坂本弁護士一家殺害事件があつた。その 5 年後の 94 年 6 月の長野県松本市でサリン事件が、そして翌 95 年 3 月には東京の地下鉄日比谷線客車内でのサリン事件が起つた。地下鉄事件では 13 名が死亡し、6000 人以上が負傷した。

この時アメリカではすでにオウム真理教をテロ集団としてフォローしてきており、当然サリンの撒布をテロ行為と的確に捉えた。それに対し当時の日本の報道ではテロリズムという概念での捉え方が欠落していたように記憶する。

テロリズムは単なる暴力行為とは異なる。権力の掌握という目的意識が無ければならない。教祖グル（師）松本智津夫にはその意志があったことが一審の判決で次のように示された。「救済の名の下に日本を支配し、その王になろうと各犯行を敢行した首謀者」と位置づけたのである。

裁判の結果がオウム真理教事件は紛れも無いテロリズムであることを明らかにしたわけだが、事件勃発当時の報道でテロという用語が聞かれなかったわけは何だったのだろうか。アメリカでは始めからテロとされていたものが、これは日本の「平和ボケ」と一括していいのだろう。戦前には、「暗殺」とか「クーデター」が「テロ」の同義語としてもっぱらこれらの用語に特化していたわけだったが。

さて先にも指摘したように、アメリカでは早速日本の首都東京のど真ん中で起こったテロリスト集団による殺傷事件として報道された。しかし日本では「テロ」という言葉は聞かれなかった。ではいったい日本では「テロ」行為をどんな言葉で表現していたのだろうか。昭和 37 年（1962）に出版された室伏哲郎著『日本のテロリスト』という一書がある。日本語のタイトルはダストカバーだけで、それを剥すとハードカバーの表紙に刻印された書名に日本語は無く、英文のみで **The Modern History of Assassination and Coup D' Etat in Japan** とある。本書の題名『日本のテロリスト』は英語の題名から忠実に邦訳すれば「日本における暗殺とクーデターの近現代史」となるのである。

これは面白い符合である。戦前の 1930 年代だったか、アメリカでは **Government by Assassination**（『暗殺政治』）と題する書籍が出版されていた。テロリズムが左右する日本政治を批判的に描いているのであった。室伏哲郎も「テロ」に当る言葉に「アサシネーション」を充てていたのである。

戦前の日本で、軍閥の国政壟断が猖獗しつつあった時、それを受けたアメリカの出版界では、**Government by Assassination** のようなタイトルの書物が出始めていたのである。アメリカ人なら『テロが壟断する政治』といった訳をつけたかもしれない。

さて室伏哲郎の『日本のテロリズム』の内容に触れておこう。巻末に収録されている加害者と被害者を時系列に整理掲載している「近代現代日本暗殺事件年表」がその一端をコンパクトに示しているといえる。被害者のトップに置かれているのは万延元年（1860）「斬刺殺」された「大老井伊直弼」であり、手段は「短銃、日本刀」とある。「暗殺者」は水戸浪士と薩摩浪士、そして場所は「日比谷桜田門外」と読める。この年表の最後は昭和 36 年（1961）12 月 12 日の「暗殺クーデター計画」とされるもので、被害者は「政府要人」とのみあり、手段は「ライフル銃、ピストル」と明記されている。その間およそ 100 年の間に 114 件の類似事件（計画を含む）が列記されている。平均すると毎年一件強の「テロ」事件（計画を含む）があったことになる。

2018年6月1日発行 第152号

私の旅のスタイル「温泉と神社めぐり」

港ユネスコ協会 副会長 平方一代



私の2018年は、清々しい空気に満ちた伊勢神宮の御垣内参拝（正式参拝）をすることから、始まりました。神官に先導され、玉砂利を踏みしめ、御垣の内側でする参拝には、新年早々、身が引き締まりました。

行が趣味の私は、今まで数多くの国内旅行をしてまいりましたが、近頃は、思い立ったらすぐ出かける、プチ旅行が楽しみの一つです。朝起きて天気が良い時、車で1時間から2時間で行ける距離の、温泉や神社を探します。とはいっても、たいていは箱根か熱海。箱根の場合、まずは箱根神社に参拝し、近場の温泉に入ります。熱海の場合は、最初に必ず、来宮神社にお詣り。

参拝の後は海の幸を食べ、温泉に浸かるのが定番です。

国内の旅では必ず温泉に行く私ですが、実は海外に行く際にも、温泉が近くにあれば、必ず寄るようにしています。初めての海外旅行はパリとブタペストでしたが、その際、ブタペストの有名なセーチェニ温泉に行ったのを皮切りに、歴代のローマ法皇がつかったと言われる、ローマ郊外のテルメ・ディ・パーピ、同じくイタリアのメラノ温泉では、巨大なリゾートプールのような温泉につかりながら雄大なアルプスを眺める、またとない経験をすることが出来ました。

また、温泉とは違いますが、フランスのルルドでした沐浴は、たいへん思い出深いものでした。ルルドは奇跡が起こる聖地と言われており、湧きでる泉の水は万病に効くと、世界中から人々が訪れる場所です。私も奇跡にあやかればと、泉の水を満たした浴槽にひたる沐浴をしたのですが、なるほど、その後体調が良くなったような気がしました。

私は温泉目当てですが、旅の目的は人それぞれです。私もまだまだ、日本の温泉地はもとより、台湾やアイスランド、アメリカなど、世界中の温泉を訪ねる旅を続けて行きたいと思っております。旅先で受けた親切は何時迄も心に残ります。来日外国人へのおもてなしが世界平和への道に繋がる事を祈ります。

2018年9月1日発行 第153号

八月に思ったこと

港ユネスコ協会 常任理事 松崎加寿子

毎夏8月には第二次世界大戦関連のテレビ番組が多いのですが、12日NHKBS放送の『悪魔の兵器はこうして誕生した—原爆科学者たちの心の闇』を見ていたところ、原爆生成のマンハッタン計画に従事した科学者たちの何枚かの集合写真のなかにヘンペルマン先生（Louis H.Hempelmann 1914～1993）を見つけました。ずんぐりとした物理や化学の学者の間で、すらっとしたいでたちの彼はアメリカの好



青年の風貌です。彼は亡父のアメリカ時代のボスでした。

亡父は 1949 年に医学部を卒業、基礎医学の道を選び生化学教室にいました。そして 1957 年から 59 年までアメリカの原子力委員会からの招聘（詳しいことは不明です）で、ニューヨーク州にあるロチェスター大学の当時放射線科を主宰されていたヘンペルマン先生のところに行ったわけです。家族を連れての留学であり、1 ドル 360 円で外貨持ち出しもかなり制限されていた時代にどうやってやりくりしたのか、当時幼かった私には知る由もありません。

あの頃のロチェスターは KODAK 社と共に栄えていた企業城下町であり、庭にはリスが来たり冬には大雪となり、こどもには楽しいところでした。戦後十数年しかたっていないのですが、JAP と言われることも殆どなかったのはアメリカ社会に寛容さや戦勝国の余裕があったせいかなと思います。さてヘンペルマン先生（奥様はあのピューリッツァー賞のピューリッツァー一族の出で、日本の『蟹工船』なども読破されるインテリと母から聞きました）ですが、マンハッタン計画に何らかの関わりがあると聞いたのはずーっと後のことです。父がそのことを知っていて留学したのかどうかもいまは不明ですが、多くの優秀な学者たちがほんとに悪魔の兵器とっていい原爆の開発に携わりました。

ヘンペルマン先生がどのような経緯で、どんな気持ちで原爆開発に関わったのか知りたと思いました。昔なら図書館通いですが、今ではインターネットを利用できるので、Hempelmann で検索してみました。なんと Atomic Heritage Foundation という団体のサイトがあり、彼がカリフォルニア州バークレイでサイクロトロンサイクロトロンの医学応用の研究をしていた時期に、マンハッタン計画に関わっていた物理学者と知り合ったことやロスアラモスでの彼の仕事（人体への放射線の影響研究）のことが判り、晩年の oral history インタビューに応じた彼の肉声まで聞くことができました。彼は医者ではありますがマンハッタン計画に関わった他の多くの学者と同様に、原爆の持つ意味を残念ながら深くは考察してなかったのかなと思いました。今日の科学技術の発達についても、その是非はユネスコ精神をもって接していきたいところですね。

2018 年 12 月 1 日発行 第 154 号

モンゴル国バヤンウルギー県サグサイ村に旅して

港ユネスコ協会 常任理事 磯部豊子

2017 年 9 月に「イヌワシ祭とカザフ人の家にホームステイのツアー」に参加してきました。ここはモンゴル西端の地で、ロシア、カザフスタン、中国に接し、アルタイ山脈の麓にあります。カザフ人が多く、モンゴル語よりカザフ語が主流です。組み立て式の家もウイと呼び、モンゴル語圏のゲルより天井が少し高いようです。このツアーの目的はカザフ人の家にホームステイし、年に一度のイヌワシ祭の見物とアルタイの高原をドライブして氷河を見ることでした。



イヌワシ祭では、イヌワシ狩り（カザフ人はタカではなくイヌワシを使う）、ククブル（山羊を馬上から奪い合う）、クズコアル（それぞれ馬に乗りながら女性が男性を鞭で叩きながら追う）などの多彩な競技が行われます。近郊から集まった人達は民族衣装で着飾り、競技に出る男達は毛皮の服に身を包んで勇ましさを誇っています。

泊まった家では、ウイが準備され、もてなしの羊を解体して料理をしてくれました。解体の前には祈り（イスラム教）が捧げられます。羊の皮を剥ぐ手伝いをさせてもらいましたが、なかなか力のいる仕事でした。羊肉と野菜の煮込み、それにミルクティー（塩をちょっと入れると何杯でも飲めます）がふるまわれました。夕食後には、家族がウイの中に集まってきて、歓迎の演奏会が始まりました。ドムブラ（弦楽器）が演奏され、大人から子どもまで代わる代わる歌ってくれました。

この地域の人達の多くは、夏と冬には家畜と共に移動するので、舗装された道路や上下水道の設備はありません。トイレは、家から4～50m離れた所に掘られた穴で、コの字型にブルーシートで囲ってあります。夜、ヘッドランプをつけて、迷わずに行くのはスリルがあります。周りには馬や牛などの寝息が聞こえ、空には落ちてきそうな星々、天の川が弧を描いています。自分も生き物の一種にすぎないと、あらためて感じさせられました。水は川から汲んできます。ですから川の水を汚さないようにしていますし、自然から得られるものを大事にしています。

首都のウランバートルに戻ると、ビルが建ちならび、自動車があふれています。空気の悪さは北京以上だそうです。一週間ほどの滞在でしたが、物は必要なだけ、それ以上は持たない生活に触れたあと日本に戻ると、情報、商品があふれかえっており、それに惑わされないようにするのに疲れます。

これほどまでに物がいるのだろうかと考えてしまいました。

2019年3月1日発行 第155号

特攻兵士の死とノーベル賞作家川端康成

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪公忠



以前に私のアメリカ留学時代の経験として倫理学特殊問題の教室で、イエズス会神父の裁断について書いた記憶がある。それが本紙の為であったかは定かではないのだが。それは太平洋戦争末期に起こったいわゆる「特攻」作戦についてであった。神父で教授の先生が「特攻作戦で死んだ日本軍の兵士の死は自殺であったか、それとも通常の戦場の死と同等であったか」との設問をまだハイティーンに過ぎない若者も交じっている教室で発したのである。そこはワシントン在のジョージタウン大学であった。

学生はほとんどがアイルランド系のカトリック信徒である。男子校であり、

みんなそれぞれの信念のもとでマッコを建前としていた時代の事である。「自殺」はキリスト教では「大罪」であり、死後の行き先は懲罰の地獄であるとされていた。神父による葬儀はご法度で、かような死に方を選んだ者の亡骸は村はずれの細道の十字路の真ん中に埋められ、通行人の土足で蹴散らされるようにされていた。

特攻は私にとっては「英雄死」であって、当時のアメリカの男性文化のなかでは、やはり「勇気ある者」の「名誉ある死」でなければならなかった。それを裏書きするように、突っ込んだ米空母の甲板上に投げ出された日本軍人をアメリカ人艦長が、アメリカ軍人の名誉ある死と同等にあつかつて、「国旗」-おそらく特攻兵士がたすき掛けにしていた日章旗-に包んで荣誉ある水葬にしたというエピソードが伝わっている。

そこに働いていた倫理は、私がジョージタウン大学で習ったと同じ論理であった。「特攻死は自殺ではない。なんとならば、特攻兵士の目的は敵艦を撃沈する事であり、その手段は自分が座乗している航空機を激突させることである。その結果として、死は予測されるが、目的ではない。」ということであった。

男性文化がマッコで固まっていた 1950 年代の事、それに護られて軍国主義時代の教育の尻尾が完全に切り離されていなかった私にとってその裁断は「詭弁」そのものに聞こえた。

しかしキリスト教を土台とする倫理学で「自殺」に非ずと裁断されてほっとしたのも事実であった。御国のために命を捧げた特攻兵士等が地獄に落ちるなど到底がえんじることなど出来ない相談であったから、私は救われた想いであった。

それから幾星霜、「特攻死は自殺であったか否か」という命題も遠い昔の事になっていた。それが最近忽然と、意識にのぼった。

あの日本のノーベル賞作家として第一号であった川端康成が、私が英語では嘲笑的に使われる「詭弁」の代名詞のような「ジェズイティカル」と呼んで憚らない知識人もいるだろうと予想される論理で、特攻兵士の死に言及しているのを発見したのである。それは敗戦の翌年 1946 年の 7 月『婦人文庫』に「生命の樹」と題して発表された小説においてであった。そこには九州の特攻基地で働いていた若い女性の主人公の言葉として、こう記されている。

強いられた死、作られた死、演じられた死ではあったろうが、ほんとうは、あれは死というものではなかったようにも思う。ただ、行為の結果が死となるのであった。行為が同時に死なのであった。しかし、死は目的ではなかった。自殺とはちがっていた。(『戦後占領期短編小説コレクション (1) 1945-46 年』、藤原書店、2007 年、96 頁。)

私が 1954 年頃に、アメリカの大学で、倫理学の特殊問題として、イエズス会士の神父で教授のヒュウ先生から学んだ「特攻死は自殺に非ず」の論理構成は日本国敗戦の翌年発表された作家川端康成の論理と全く同じなのであった。後にノーベル文学賞を受ける川端は敗戦翌年の此の時 46 歳であった。

メキシコ大学院大学の思い出

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪公忠



本年10月1日に中華人民共和国としての現代中国は建国70周年を迎える。その立役者は毀誉褒貶相半ばする毛沢東(1893-1976)である。日中戦線を勝ち抜くことに貢献したが、建国後の中国を計り知れぬ混乱に導いた文化大革命もその功罪のうちにある。それについても思い起こすのは、私の個人的経験であったメキシコ大学院大学での半年にわたる客員教授としての思い出である。

それは1969年9月から1970年3月までの半年間の事であった。当時文部大臣を引き受けていた永井道雄さんが、メキシコ合衆国の首都メキシコ市の国立メキシコ大学院大学に日本文化講座を開設し、そこでの講義を頼まれたのだ。

永井さんからは、明治維新後の日本の近代化路線の歴史を教えることを提案された。時はあたかも「明治100年」を祝ったばかりのころであった。日本は近代化に成功したとされていた。それに対し中国は毛沢東の指導の下で、混乱を極めていた。いわゆる「文化大革命」政策の結果であった。

その頃アメリカの大学では日本と中国を比較対象とする近代化論の研究が進んでいた。その中心にいたのはプリンストン大学のマリウス・B・ジャンセン教授であった。私はちょうどジャンセン教授を指導教授としてプリンストンで博士号を取得し、帰国後、上智大学の国際関係研究所の創設に参画したばかりのときであった。明治100年を迎え、太平洋戦争に敗北・失敗した近代国家日本ではなく、真逆に、中国との比較において東アジアでの唯一無二の近代化に成功した例、とされたのである。

しかし日本の歴史学会では、これを当時駐日大使に就任したばかりのハーヴァード大学のライシャワー教授に引っ掛けて、「アメリカによる同盟国日本への肩入れのライシャワー攻勢」とされていたのである。「軍国主義の前科者国家、日本」ではなく、アメリカにならって「民主主義、自由主義万歳の新日本」になるという事であった。

当時日本の中国学者は、押しなべて「文革」をもう一つの「近代化」として高く評価していた。八幡製鉄のような巨大な工業化ではなく、「個人が自分の家の裏庭で、鍋や鉄瓶を铸造している」と報告していた。中国専門家のうちで唯一、例外だったのは中嶋嶺雄東京外国語大学教授だけであった。中嶋教授は香港に居を定め、文革の経緯を観察していた。毎日、多数の人間の死骸が大陸から流れてきていたという。後に中国政府自身が公表した総数は3000万人にのぼっていた、と記憶する。これが文革という変革をもたらした一結果とされた。

今年10月1日は中国共産党政権にとって建国70年の節目である。この時に当たって、毛沢東人氣が再燃している、という。しかしそれは「文革」とは絶縁した、一般の市民と変わるところの無い「質素で穏健な好人物」としてであるらしい。今日の中国の最高指導者である習近平国家主席が進めている反腐敗闘争にとって、毛沢東は清廉潔白なリーダーの鏡になる、ということだ。

前置きのつもりが長くなってしまった。問題はメキシコの国立大学院大学で何が起きたかということ

である。私の講義が始まって2、3週間は経っていたらどうか。コロンビア出身のセレスティーノという学生が言ったのである。「我々ラテンアメリカの学生にとって、明治日本の近代化路線の歴史はイレヴェヴァントである。今日のラテンアメリカ諸国にとっては、現代中国が体験している文化大革命こそが、数多くのポジティブな教訓を示している、と言えるでしょう」と。そして続けて「是非、文化大革命の話が聞きたい」と言うのであった。

それに私はどう対応したか。私が承知している事のうちには、母校プリンストン大学のことがあった。60年代に世界中の大学キャンパスを吹き荒れた学園紛争のあとで、一時の平和が訪れた時、プリンストンの学部学生はヘルマン・ヘッセの『シッダルタ』の購読を要望した。すると大学当局はその要望を具体化して、学生に応えたのであった。付加価値創造型の教科目内容の変更であった。学生の私への要望に対して、起った事は刮目に値する。私が外務省の担当官に提案した「中国の『文革』を教えることのできるのは宇野重昭・成蹊大学教授」が早速、具体化されたのである。

一見、時代離れした牧歌的展開のように見えるかもしれないが、メキシコの高等教育機関が置かれていた変革への切迫感からして、妥当な対応であった、と言えるかもしれない。数ヶ月前に、学園紛争制圧のために銃砲が使われたばかりで、街中に立地している校舎の外壁は分厚いガラス張りであったが、街路に面した6階の教室の壁面には、官憲が放った銃弾が貫通した、直径2センチほどの穴が此処彼処にいくつか生々しく残っていたのである。

若い政治学担当の教師の研究室の扉には部屋側にフィデル・カストロの大きな肖像写真のポスターが貼られていたりした。若い日系女性の教師が「白人の教師達は、近郊のメスティーソの貧農が鋤や鍬をかっいで市中のインテリ層をも敵とする階級闘争に攻め入ってくる、と本気で心配しています」と教えてくれたりもした。そんな世相の時代であった。
(2019・3・30記)

(三輪公忠=みわ・きみただ=上智大学名誉教授・元同大学国際関係研究所長)

2019年9月1日発行 第157号

政治の動きに惑わされずにユネスコ精神を語り継いでいこう

港ユネスコ協会 会長 永野 博



現在、日韓関係が悪化しているが、韓国のユネスコ協会連盟の代表は毎年、日本ユネスコ協会連盟の全国大会に出席されている。これまでも日韓関係は良くなったり、悪くなったりという波を繰り返している。それぞれの国民一人一人の考えが突然、正反対に転換することはあり得ないので、結局、政治の波に国民感情が影響を受けていることになる。過去の歴史映像をみていると、昔はこんなことが異常にエスカレートして戦争になったのかもしれないが、現在は、それなりの抑止力が働いているだけでも幸せである。しかし世界をみると局地的な戦争は続いているし、アジアでも不安の種には事欠かない。

い。

第二次世界大戦の終結を機に誕生したユネスコは、教育、科学、文化を通じて世界の平和が達成されることを願って創設された。我が国では戦後の平和を希求する人々に熱狂的に歓迎されたが、世界の平和が長続きするに伴い、ユネスコを口にする人も少なくなった。しかし、歴史は繰り返される。そこで求められることが、個々人が思考の根底にしっかりとした価値観を有することである。そうでないと、私たちは扇動的な動きに流され、価値観の原点がどこにあるのかを忘れかねない。「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和のとりでを築かなければならない」という、一人一人がしっかりと心の中に持ち続けなければいけない理念がその存在感をこれから増してくるのは疑いない。幸い、ユネスコ運動は我が国の近隣諸国でも盛んであり、日中韓の共同事業も政治の波があっても継続していることは素晴らしい。

わが国をめぐる国際環境は戦後、平穏な時期が長い間続いてきた。このため平和を希求するユネスコ精神も、高齢者のお守りのようになってしまった感も否めない。この理念をどう若い世代につないでいくのが現下の最大の課題である。戦争直後のように、メディアが揃ってユネスコ、ユネスコと声高に宣伝してくれることもないので、地域ユネスコ協会がその真価を発揮すべき時期がきている。港ユネスコ協会でも都立三田高校ユネスコ委員会、慶應義塾大学・ユネスコクラブ、玉川大学ユネスコクラブ、東京海洋大学との連携を一部、始めている。できるだけ、若い方々にユネスコ運動の存在を知ってもらい、このような地道な活動が、長い目で見て世界の平和につながることを期待している。

2019年12月1日発行 第158号

中国企業が輸出する監視システム

港ユネスコ協会 名誉会長 三輪公忠



中国の防衛白書を瞥見すると、まず地球上全域に軍事拠点を設けるとしている事に注意がひかれる。吃驚してはいけない。米中勢力拮抗の現実を目を向ければ何も特別目くじらたてることでもない。今やそれが国際政治の紛れもない現実なのだから。

アメリカの軍事拠点と軍事介入の歴史を思いおこせば中国の行動に納得がいくのではないか。むかし米ソの2極対立の時代があった。米ソ冷戦時代のことである。時代は移り、現代の世界的広がりを持った冷戦は米中間に存在していると言って過言ではない。

時代は今や国防も安全保障も AI(人工知能)の援け無しには万全を期し得ない。その折から、習近平を国家主席とする独裁体制下の中国企業は完成度が高い監視システムを世界各地に売り込んでいる。その広がりには既存の国際法世界秩序に中国に都合のいい風穴を開けることになるだろう。中国に都合のいい新国際秩序が生まれ出てくるかもしれない。

我々は日米同盟の枠組みの中にいるので、中国が仮想敵国であることを承知していなければならない。そしてその中国は GDP が今やアメリカに匹敵する経済大国であることも忘れてはならない。かつて一

時世界で一番の経済大国に昇りつめんとしていた我が国ではあったが、今日では第5位になっているそうだ。

時あたかもオリンピック開催があと1年と迫った我が国である。メイン会場の国立新競技場の完成も近づいている。成熟国家としての日本のそして日本人の魅力をいやがうえにも万国の来訪者に満喫してもらえたらいいなと思う。

(三輪公忠=みわ・きみただ=上智大学名誉教授・元同大学国際関係研究所長)

2020年3月1日発行 第159号

「平和を考えるシリーズ」が目ざすもの

港ユネスコ協会 会長 永野博



ユネスコ協会では昨年「平和を考えるシリーズ」を始めた。第1回は聖心女子大学の永田佳之教授に企画をお願いし、「気候変動についてできること～SDGsのための学びとアクション」をテーマとしたシンポジウムを開催した。シンポジウムの計画後に房総半島を中心に累次の豪雨被害が発生するとともに、シンポジウムの開催日が丁度、パリ協定による気温の上昇限度の目標値1.5度～2度未満をどう達成するかを話し合うマドリッドでの国際会議(COP25)の開催時期と合致したため、意図しなかった盛り上がりを見せることができた。

気候変動と平和というどんな関係？と思うが、じつは世界の平和とおおいに関係している。私自身、10年近く前にアメリカで“Climate Security”(気候安全保障)というパネル討論への参加を求められたことがあり、何を話すべきなのか苦労した覚えがある。その時わかったことは、中東やアフリカ中部における混乱は、気候変化のため、ある地域で食糧の確保が難しくなったため人々が移動せざるをえなくなり、それが地域紛争の発端の一因となっているということであった。その記憶が残っていたので、今回の平和を考えるシンポジウムのテーマとして気候変動は最適だと考えた。

この気候変動問題を背景に現在、若い人による社会変革の動きが世界的に広まっている。昨年、ドイツに行った時に、最近ではFFFが凄いですというので何のことかと聞いてみると、気候変動対策を求める若者主導活動、フライデー・フォー・フューチャーの略だった。スウェーデンのグレタ・トゥーンベリさんが15歳の時に始めた運動で、金曜日は学校に行かずに、気候変動問題で大人に過去の行動の反省を迫るため外に出て社会の変革を迫ろうというもので、ドイツでは金曜日は学校の授業ができなくなっているという話だった。

FFFと聞いても、とりあえず日本とは関係ない話だと思っていたところ、このシンポジウムのパネリストとして永田先生が招いた聖心女子大学4年生の岡田英里さんが率先してFFF運動を東京で先頭に立って盛り上げようとしていることを知り、若い人の力強さや日本も捨てたものではないなということ会場の方々と一緒に感じる事ができた。都会のユネスコ運動で若い人を巻き込むのは容易ではな

いが、港ユネスコ協会でも最近、慶應義塾大学のユネスコクラブと連絡を取ったり、東京海洋大学の佐々木教授と協力して芝浦近辺の運河を船でめぐり、生物資源の観察などを学生と一緒にしている。うまく若い力をユネスコ運動に導入し、若い人の社会への発信を港ユネスコ協会が支援できたらよいのではないかと考えている。またそれが地域ユネスコの活性化をもたらす原動力になるのではないだろうか。

2020年6月1日発行 第160号

大切にしたい日本人の細やかな感性

港ユネスコ協会 副会長 菊地賢介



今年ももうすぐ梅雨に入りますが梅雨と書いて「つゆ」と読むのは何故だろうと調べてみました。梅の実が熟する頃の雨だから梅雨、黴をもたらす雨だから黴雨だが、風情を考えて梅雨とした。「つゆ」は、降り続く雨で常に樹木が露を湛えているから、また、長雨の湿気で食物や衣類が潰れゆるから「ついゆ・つゆ」と言った、等と書いてありましたが、由来は今一つはっきりしませんでした。やはり日本語の成り立ちは複雑で難しいと言うことなのでしょう。また、それに加えて三月下旬から四月に掛けての長雨を「菜種梅雨」、五月の長雨を「走り梅雨」、梅雨明け後の長雨を「戻り梅雨」、さらに、旧暦五月の雨、つまり梅雨つゆを五月雨（さみだれ）とも言うことに至っては日本人の感性の細やかさと同時に、自然と共生する暮らしの工夫が偲べれます。

さてこの度の新型コロナウイルス禍での国内感染では一人一人が社会秩序を守り細やかな気遣いと清潔感のある国民性が世界の感染率からみても最小限に抑えることが出来、世界中から注目された。ただこれからは新たな社会システムの変化が進み我々もその変化に対応せざるを得ないのではないか。

「新しい生活様式」が社会環境の変化をもたらす日本人が長い歴史の中で積み重ねてきた素晴らしい国民性、人に対する思いやり、家族愛などの変化が将来どのようなようになるのかが気になるところで、潮目が変わった今、人としての感性を、より高めて行くには教育制度の再構築、さまざまな体験、そして多くの人々とのアナログ的対面交流は不可欠で AI（人工知能）化 テレワーク化も避けては通れず、バランスを取り間違いのない方向性を見極めながら、我々が先祖から受け継いだ季節感心の感性など日本の伝統文化が失われないよう努力することこそが世界から見て個性のある素晴らしい日本の姿ではないかと考えます。

江戸時代の俳人山口素堂

目には青葉山ほととぎす初鯉

新型コロナウイルス感染症により明らかになった今とこれから

港ユネスコ協会 会長 永野 博



今年は年初より新型コロナウイルス感染症の話題が世界を覆っている。メディアに限らず私たちもコロナに触れずには一日が終わらない。戦争を経験したことのない75歳以下の人々にとって外出規制は青天の霹靂だし、こんなことが短い人生の間で発生するとは全く予想していなかった。

この新しい感染症が脅威となったことで顕在化したことがいろいろある。科学技術立国を標榜し、情報技術でも先端を走っていた日本は、2001年にe-Japanを宣言し、電子政府の設立を高らかに唄った。しかし20年たった今、感染者の連絡をファックスで行い、届いた情報を書き直してリストを作っているという情けない状態が明らかになった。民主主義に基づく法治国家であることへの疑いもなかったが、外出規制の仕組みはすべてお願いベースで、従うか従わないかは法律とは関係なく個人の判断になる。すると自粛警察というような活動が現れた。国と地方自治体の権限がどこで区分されているのか不明確なので、とるべき措置が遅れ、自治体ごとにばらばらになる。都道府県により重症者の定義が異なるのでは、そもそも統計の数値が意味をなさない。ポジティブに考えればと、これまでの不作為を是正できる恰好な機会がきたということになる。

政府の新型コロナウイルス感染症対策に多くの人は満足していない。その原因は、経済を動かしたいという思いがある中で、政府がどのような根拠で何をしたいのかをはっきり言わないことに原因がある。このような事態が起こると感染症の専門家の意見を聞くことになるが、専門家が本当に何を語っているのかが外に見えてこない。外に出てくるのは政府や政治家と調整を経た後の話である。すると国民は専門家の考えがわからず疑心暗鬼となって、政府への信頼が低下する。ひいては専門家への批判も出てきかねない。専門家会議の議事録が作られない、公開されないというもおかしな話である。専門家と政治家の考えが異なるのは、両者の背景が違うので当然のことなので、専門家の考えがどのようなものかがわかり、それに対して政治家が別の理由でその専門的意見を咀嚼したうえでどう決断したかがわかれば、国民はそれなりに納得するし、議論をすることもできる。そのような議論の経過を公表しないのであれば、政府も政治も国民目線から遊離していると言わざるを得ない。

世界の人々に脅威を与えている今回の感染症を契機として、私たちの生活や社会についての新しいシステムの模索が続けられていくことになる。これは単に、リモートワークができる、通勤の負担が少なくなる、ということだけでなく、何を大事だと考えるのかという価値観の転換、ひいては私たち一人一人がすべてのことに対して自らの考えをしっかりと持つことを求められることになる。そのためには日頃から自由に語り合い、意見を戦わせる場が不可欠である。私たちの草の根的ユネスコ活動が貢献すべき場面であることは間違いない。

2020年12月1日発行 第162号

ユネスコ活動でアフターコロナの社会を構想しよう

港ユネスコ協会 会長 永野 博



令和2年はコロナの年と後年、記憶されるでしょう。日本では今のところ都市封鎖まではいっていませんが、移動の自由も制限されて出張もほとんどなくなりました。その結果、求められているのがリモートワークなどのニューノーマルです。通勤電車には乗らなくてよいし、仕事の時間も柔軟に設定できる。しかし、家に仕事をするスペースのない人の場合は、どこで仕事をしたらよいのかという悩みも聞こえます。

新型コロナウイルス感染症は私たちの生活パターンを有無を言わずに変えていくでしょう。一つは世の中のデジタル化です。最近は報道でもデジタルトランスフォーメーション、略してDXという表現が頻繁にでてきます。日本では何年たっても実現しないとされていた自宅でのリモートワークが半年で普通になってしまいました。伝統文化ともいえる印章の使用もなくなるかもしれません。外圧でなら変化するといわれる日本を地で行く感じがします。

この変化にどう対応していくのかが私たち個人個人ばかりでなく、社会全体に問われています。仕事の仕方、家庭での過ごし方、余暇の楽しみ方、教育の在り方、都会と地方の関係など社会の骨格をなしているシステムがアフターコロナでは確実に変わっていく勢いですが、ここで私たちに課せられる大きな課題は、その新しいシステムに私たちが受け身的に対応していくのか、それとも新しいシステムを私たちが自ら思案し、作っていくのか、どちらを選ぶのかという点にあると思います。私たちはやはり、予見できる近未来に向けて、私たちが幸せになれるような社会はどのような社会かを考え、議論し、実現していく責務があると思います。

日本では日頃から市民レベルでそのようなことを議論する場が多くありません。草の根運動の原点でもある民間ユネスコ活動はある意味、その運動体として最適な存在です。港ユネスコ協会では令和元年より平和を考えるシンポジウム・シリーズを開始しました。第1回は気候変動に関する個人や地域の取組を事例にSDGsのための学びとアクションを取り上げました。今月開催を予定している第2回では、人類の存続を左右する海を知り、持続可能な地球を目指すために来年から始まる国連海洋科学の10年について理解を深めます。港ユネスコ協会では、ユネスコ憲章を念頭におきながら、これからの世代にどのような社会を受け渡していくかを考える機会を継続して作っていきたいと考えています。

2021年3月1日発行 第163号

ユネスコと海

港ユネスコ協会 会長 永野 博

「国連海洋科学の10年」が今年、スタートします。これは海を良く知り、持続可能な地球を目指す



国連全体の活動です。我が国は長い海岸線に囲まれ、さまざまな海の恩恵を受けていますが、10年前の東日本大震災における津波のような自然災害にみまわれることもあります。近年では海洋プラスチックの問題や気候変動と海洋の関係が知られるようになってきました。海洋プラスチックについては、海の生物が大量に飲み込んでいる写真を見ますが、プラスチックが微小になってそれが魚を通して人間にも入り込みどのような影響を人体に与えているのかはまだ研究途上のようなようです。気候変動に関しては、海洋の温度上昇により近海でとれていた魚がとれなくなったり、強烈に発達した台風が日本を襲うということも目立ち始めました。

ユネスコは「海洋科学の10年」のリード機関です。何故でしょうか。ユネスコは国連教育科学文化機関という名称が示すように科学も担当していて、科学での事業の一つが海となっているからです。科学が入っているのには理由があります。第二次世界大戦も終盤にさしかかった時期に連合国の間では教育、文化を振興して平和を築くことを任務とする国際的な組織の設立を検討していましたが、科学は入っていませんでした。しかし、米国による広島、長崎への原爆投下の事実に接し、科学も含めた機関とすることになったとのことで、科学が入っていることに日本との関係を感じざるをえません。

港ユネスコ協会では12月に、日本ユネスコ国内委員会の政府間海洋学委員会（IOC）分科会の主査を務める道田豊東京大学教授に中心となっていただき、「魅力ある海を次世代につなぐために」というシンポジウムを開催しました。コロナ禍での開催のため初めてZoomでの開催としたところ、全国各地からの視聴がありました。冒頭には日本ユネスコ国内委員会田口康事務総長の挨拶もいただき、海洋科学の10年の意義、行うべき行動などについて討論しました。

今年の1月にはシンポジウムのパネリストもされた東京海洋大学の佐々木先生の研究室との共催で、東京湾の運河をクルーズ船で巡り、「森・川・海とそのつながり」について学ぶクルーズを小学生から大学生までを対象として開催し、海からの東京の姿を見て、港区はいかに海との関係が深いのかを実感しました。

私の子供の頃は、東京の近辺でも潮干狩りができ海は身近な存在でしたので、まさに今昔の感に堪えません。港ユネスコ協会では、身近なところから海にも触れ、人類の生存をも左右する海についての問題を地に足のついた形で考える機会を作っていきたいと考えています。

2021年6月1日発行 第164号

日本のユネスコ加盟70周年にあたって

港ユネスコ協会 会長 永野 博

日本は1951年にユネスコに加盟したので、今年で70年になります。サンフランシスコ講和条約発効前の米軍占領下での加盟実現は、当時の日本人々に大きな希望をもたらしたことでしょう。戦争直後に仙台で始まった民間ユネスコ運動が日本のユネスコ加盟の原動力になったわけですが、平和を希求した当時の人々の気持ちは想像に難くありません。私も子供の頃に、日本は東洋のスイスになるという言



葉を聞いた記憶があります。スイスの自然の美しさを見習うということはないと思いますので、永世中立で平和を維持しているスイスのような国になりたいと多くの人が未来の姿を思い描いていたのではないのでしょうか。

ユネスコの理念である平和の実現は、現実には極めて難しいものがあります。現在でも戦闘やクーデターが起きていますし、国家間の不協和音は東アジアでもことかきません。これに対抗するための即効薬は残念ながらありません。ユネスコが標榜している人々の間の異文化理解、それに資する寛容な心を育む教育しかないと思います。しかし、その実行には手間暇がかかりますし、誰かが指令を出せば変化するというものでもありません。日本でもヘイトスピーチ対策法を作らざるをえなくなりましたし、移民国家である米国でさえ新型コロナへの感染を契機としてアジア人への襲撃が起きており、異文化交流が簡単なものではないということがわかります。ユネスコはこのような現実の世界にあって、国家間の条約としては極めてユニークな文化多様性条約という「文化的表現の多様性を保護し、促進すること」を目的とする条約を 2005 年に作りました。世界は今、その実践が問われています。

ユネスコ加盟 70 周年の今年は、ユネスコエコパーク（自然と人の調和と共生を実現しようという地域で、日本にも 10 か所あります）を推進する「ユネスコ人間と生物圏（MAB）計画」の 50 周年、またユネスコがリーダーとなって行動する国連海洋科学の 10 年のスタートの年でもあります。東アジア情勢も穏やかでない中、民間ユネスコ運動がユネスコの理念を掲げて平和について考える機会を内外の人々と共有することの意義はますます高まっていますので、このような価値を共有できる会員を増やしていくことも必要だと考えています。新型コロナ感染症のため各地のユネスコ協会での活動には支障もみられますが、そのような中でも相互の協力もしつつ着実な活動を続けていきたいと考えています。

2021 年 9 月 1 日発行 第 165 号

新型コロナ感染症を克服して向かう先は？

港ユネスコ協会 会長 永野 博



皆さま、新型コロナ感染症がデルタ株に変化する中、ご無事で過ごされていることを祈念しております。私自身もこれほど感染が長引き、東京五輪が無観客で行わざるをえなくなるとは思っていませんでした。しかし歴史をみれば、中世に流行したペストは言わずもがなですが、100 年前のスペイン風邪を学べば、1 年で収束するはずがないわけで、私には歴史に学ぶ姿勢がなかったと言わざるを得ません。ただ、科学技術の進歩により 1 年もたたないうちにワクチンができたことは素晴らしいことです。もっとも日本がワクチンの開発にも、ワクチンの接種にも出遅れたということは、世界における日本の科学技術力が相対的に低下していることを目の当たりにさせました。日本の資産といえば頭脳しかないにもかかわらず、政府が有効な科学技術への投資を行えないことは日本の将来に暗い影を投

げかけています。

新型コロナ感染症は地域ユネスコ活動に大きな影響を与えています。港ユネスコ協会でも昨年度は多くの行事が中止に追い込まれました。しかし、年度途中より Zoom などの新しい情報技術を利用しようという試みに取り組み始めました。技術の習得が難しく、いまだ学習中ですが、昨年開催しました国連海洋科学の10年のスタートをテーマとしたシンポジウムには、北は北海道から南は九州まで、多くの方が参加されました。これまで港ユネスコ協会の活動への参加は近隣の方々だけでしたので、これはコロナ感染症がもたらした画期的な、港ユネスコ協会の活動に変革をもたらす出来事でした。

新型コロナ感染症の収束後はどのような社会になるのでしょうか。明らかに元通りには戻りません。単に情報技術の利用が拡大するというだけでなく、私たちの考え方、例えば、勤務先に本当に毎日通勤するべきなのか、どこに住んだらよいのか、誰のために働くのか、そもそも人間にとって何が幸せなのか、というような課題が問い直されてくるでしょう。これに加えて気候変動による地球温暖化などの大きな社会的課題の現実化ともあいまって私たちの価値観が大きく変革する可能性があります。平和の理念の実現に向け多様に活動する地域ユネスコ協会もこれまで以上に、どこに軸足を置き、何に挑戦していくべきかを自ら考えることが求められてきます。港ユネスコ協会としても、しっかり考え、変革する社会にとって意味のある活動をする存在となる努力を重ねていきたいと考えております。

2021年12月1日発行 第166号

日本の良さを失うことなく、出る杭を伸ばす社会を作ろう！

港ユネスコ協会 会長 永野 博

技術の進歩は著しく、今や携帯電話がないと何もできない。先日、京王線の駅を出る際にスマホがないことに気づき、駅で忘れ物の届を出したところ、少し先の駅で乗客が届けてくれたことが判明した。去年は都営大江戸線で大事な手帳を落としたが、やはり乗客が届けてくれていた。パリでの何度もの盗難を思いだし、日本は素晴らしいと思うことしきりである。

そこで改めて日本人の行動を考えてみたくなった。まずはマスクである。欧米諸国では、マスク着用令がでたところ暴動に発展しているところがある。コロナ対策で、政府の措置がいかに稚拙であっても他国ほど蔓延しないのは、市民一人一人がマスク、手洗いをしっかりしているからに違いない。



しかし好きでない例もある。最近、家の近くの幅2メートル程度と狭く、車もほとんど通らない場所に信号が設置された。車が停止すればよい場所であり、信号が必要とは思えない。赤でも歩く歩行者が多いが、待っている人もいる。ある時、私が渡ると、そこにある交番の巡査が、他の人が待っているのだから渡らないようにと言う。警察の立場はわかるが、問題が二つある。そもそも信号の必要性を議論する場がなかったということと、横並び発想を注意の根拠とすることだ。ここでは後者について考えて

みたい。

今や世界の経済ではスタートアップの支援が最大課題と言ってもいいが、日本では起業が少ない。横並びを破って出てくる杭を出ないように打っていたらいつになっても社会の変革は起こらず、ユニコーンもでてこない。東大で一番スタートアップを出している教授によれば、今でも大学では起業活動に対する本心からの尊敬は乏しいとのことであった。

そこへいくと、各地のユネスコ協会が自らに適した平和を実現するための活動を行うという民間ユネスコ運動は、それぞれの価値観を大事にする草の根運動の姿をよく表している。連合軍による占領の終わる前に日本のユネスコ加盟を実現に導いたボトムアップのパワーは凄い。しかし現在、各地の協会は平和の理念を旗印に活動した方々の高齢化に直面しており、若い後継世代へのユネスコ活動の継承が最大の課題である。東京では若い人を中心にユネスコの精神に共感する仲間を増やそうという「2,000人プロジェクト」が進行中であり、日本の良さを失うことなく、出る杭を伸ばす活動が盛んになることを祈っている。